ISSN 1344-1957

Shelley Studies

The Works & Epoch 1792-1851

Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center

日本シェリー研究センター年報　第 26 号 (2018 年 7 月)

FRANKENREADS

Participating in the international celebration of the 200th anniversary of Mary Shelley's *Frankenstein* in 2018 organized by the Keats-Shelley Association of America.

Vol. 26 (2018)

Shelley Studies

The Works & Epoch 1792-1851

Vol. 26 Summer 2018

Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center

日本シェリー研究センター年報

第 26 号　（2018 年 7 月）

ISSN 1344-1957

The Bulletin of Japan Shelley Studies Center (*Shelley Studies*) is published annually by Japan Shelley Studies Center. It features articles on the works of Percy and Mary Shelley and on their milieu. The articles include reports and discussions in literary, social and historical topics appertaining to the period of their life time. The editors welcome submissions from members and non-members of the society interested in the subjects.

Japan Shelley Studies Center

President	会長
ABE Miharu	阿部 美春

Secretaries	幹事
HOSOKAWA Minae	細川 美苗
KASAHARA Yorimichi	笠原 順路
KITANI Itsuki	木谷 厳
KUROSE Yukako	黒瀬 悠佳子
NIINA Masumi	新名 ますみ
OKA Hayato	岡　隼人
SHIRAISHI Harue	白石 治恵
TAKUBO Hiroshi	田久保 浩
UENO Kazuhiro	上野 和廣

Auditors	会計監査
KOYANAGI Yasuko	小柳 康子
SASAKI Mari	佐々木 眞理

Office

日本シェリー研究センター 事務局

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町 582 番地 酪農学園大学 白石治恵 気付

Japan Shelley Studies Center c/o SHIRAISHI Harue, Rakuno Gakuen Universiy,

582 Bunkyodai Midorimachi, Ebetsu-shi, Hokkaido, Japan 069-8501

Tel & Fax:　+81-11-388-4877

E-mail:　harues@rakuno.ac.jp

Cover design reproduced with digital effects from the image in Carl H. Pforzheimer Collection of Shelley and His Circle, The New York Public Library. (1823 - 1860). Mr. T. P. Cooke, of the Theatre Royal Covent Garden, in the character of the monster in the dramatic romance of Frankenstein Retrieved from http://digitalcollections.nypl.org/items/78abffff-24da-1e46-e040-e00a18064970

Contents

News 1

Feature Articles:
Commemorating the 200th Anniversary of the Publication of *Frankenstein*

Invitation to the 200th Anniversary of the Publication of *Frankenstein*
ABE Miharu 2

The Scientific Shelleys:
A New Solution to the Sum of Shelley, Mary, and Science NIINA Masumi 3

Shelley the 'Romantic' Scientist: Publicising Secular Ideology in *Queen Mab*
YONETA Lawrence Masakazu 5

Natural Philosophy and Necessitarianism in *Frankenstein*
SUZUKI Rina 6

The Tempest of the Shelleys：A Wind of Lucretius' Atomism
UKI Kenichi 9

A Reading of Shelley's "Ode to Liberty" YOSHIOKA Nobuo 12

A Marxist Analysis of Shelley's Prose: *An Address to the Irish People*
MOTOJIMA Nobuya 14

Review
On the Bullet Train with Emily Brontë: Wuthering Heights in Japan
by Judith Pascoe
TAKUBO Hiroshi 20

Japan Shelley Studies Center Archives II ABE Miharu 23

Member Updates 29

Annual Bibliography 30

Announcements 31

Articles of Japan Shelley Studies Center

NEWS

The twenty-sixth annual conference of Japan Shelley Studies Center (JSSC) was held at Sanjo Conference Hall on Hongo Campus, University of Tokyo on December 2, 2017. Professor Motonobu Yoshioka gave a special lecture on a reading of Shelley's *Ode to Liberty,* followed by a symposium titled "The Scientific Shelleys." Masumi Niina moderated the symposium. Speakers were Lawrence Masakazu Yoneta, Rina Suzuki, and Kenichi Uki. They engaged the audience with a lively discussion on the literature and science with Percy and Mary Shelley. The synopses appear below.

Twenty-seventh conference will be held at Ritsumeikan University in Kyoto on Saturday, December 1, 2018. The program will include a special lecture by Professor Christoph Bode as introduced by the President Abe in this issue. "*Frankenstein* and Prometheus Cult" is the topic of the symposium which Nahoko Miyamoto Alvey is to organize. She will discuss the theme with two other speakers: Professor Yumiko Hirono and Miharu Abe.

Japan Shelley Studies Center is participating in Frankenreads, a project of the Keats-Shelley Association of America to celebrate the 200th anniversary of Mary Shelley's novel *Frankenstein, or The Modern Prometheus* (1818) encouraging people around the world to organize or participate in events celebrating the novel. We hope to contribute to the project with the plenary lecture by Professor Christoph Bode and the symposium at this year's Annual Conference.

シェリー研究センターは、平成 29（2017）年 12 月 2 日（土）東京大学本郷キャンパス内山上会館にて第 26 回大会を開催した。阿部美春会長の挨拶に引き続き黒瀬悠佳子氏の司会でプログラムが行われ、吉岡丕展氏が「*Ode to Liberty* を読む――A Reading of Shelley's *Ode to Liberty*」と題して、特別講演を行った。

続くシンポージアムでは、「The Scientific Shelleys――『Shelley + Mary + 科学』の新たな解答」をテーマに、 司会とレスポンスを新名ますみ氏が、パネリストを米田ローレンス正和氏、鈴木里奈氏、および宇木権一氏が務めて、パーシー、メアリー、ゴドウィンなどシェリーサークルによる当時の最新思想および科学と古典文学を融合した新しい文学の創造について、フロアからの意見も交えて活発な議論がなされた。

総会は飛鷹敬治氏を議長に行われた。まず会計の黒瀬悠佳子氏より会計報告があり、承認された。次いで任期満了の役員（阿部氏、上野氏、木谷氏、黒瀬氏、細川氏、白石）の再任が承認された。懇親会は木谷厳氏の司会のもと、和やかな雰囲気で行われた。

次回第 27 回大会は、平成 30（2018）年 12 月 1 日（土）立命館大学衣笠キャンパスにて、クリストフ・ボード氏による特別講演、「プロメテウス・カルトと『フランケンシュタイン』」をテーマとして、司会をアルヴィ宮本なほ子氏、パネリストを廣野由美子氏、阿部美春会長が務めるシンポージアムが行われる予定である。

2018 年は『フランケンシュタイン』出版 200 周年にあたり、アメリカ、キーツ=シェリー協会では、Frankenreads という名のもとに世界各地でこの年を記念するイベント企画を呼び掛けており、本学会の 2018 年大会におけるボード氏の講演および『フランケンシュタイン』とプロメテウス・カルトをめぐるシンポジウムによってこの企画に貢献したい。

Annual Conference 2018:

Invitation to Lecture and Symposium in Commemoration of the 200th Anniversary of the Publication of *Frankenstein*

Between 2016 that marks the 200th anniversary of the conception of *Frankenstein, or Modern Prometheus* and 2018, the 200th year of its first publication, we have planned events reassessing the impact that Mary Shelley's creation has had on the imagination of the modern mind, and we organized talks and symposiums discussing the milieu that brought about the creation. In the 2016 Annual Conference we focused on Lake Geneva association and Jean Jacque Rousseau that led to the conception of a creature created by a human. In 2017 we explored the scientific background for the Shelleys, and this year we are going to examine German Gothic fiction and Promethean myth for the understanding of the work that Mary and Percy Shelley were projecting.

日本シェリー研究センター第 27 回大会へのご案内
『フランケンシュタイン』出版二百周年記念特別プログラム

阿部　美春

『フランケンシュタイン』誕生と出版二百周年にあたる 2016 年から 2018 年、日本シェリー研究センターでは、特別企画として、作品のミリュウに焦点をあてた講演とシンポジウムを持ってきました。2016 年は、恐怖小説競作の発端となった 1816 年夏ジュネーヴ湖畔でのシェリー・バイロン・サークルの文学的交流と、ジュネーヴの生んだ思想家ルソーに焦点をあて、講演とシンポジウムを持ち、イギリス・ロマン派第二世代の文学をめぐる新たな知見を得ました。企画をしめくくる今年は、作品誕生の契機となったドイツ恐怖小説と、時代の「プロメテウス熱」から、イギリス・ロマン派第二世代の文学の背景を検証していきます。

特別講演　German Influences on *Frankenstein*

特別講演は、ドイツから J・H・クリストフ・ボード氏（ルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン）を招聘し、"German Influences on *Frankenstein*" というテーマで講演をしていただきます。1816 年夏シェリー・バイロン・サークルの若者たちが恐怖小説競作を試みた背景には、フランス語訳によるドイツの幽霊譚『ファンタスマゴリアーナ』（1812 年パリで出版）があったことはよく知られていますが、ドイツ恐怖小説の影響については、さらなる考察がまたれる分野であり、今回のご講演が期待されます。奇しくもボード氏が所属されるルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘンの前身は、物語で若きフランケンシュタインが学び、生命創造に没頭したインゴルシュタット大学（1410 年創設、1826 年移転しルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘンとなる）です。二百年の時を経て、フィクションと現実が交錯する不思議な縁を感じます。

シンポジウム　プロメテウス熱の時代

シンポジウムは、作品の副タイトル「現代のプロメテウスに」に着目し、時代のプロメテウス熱をテーマに、シェリー・バイロン・サークルそしてロマン派にとってのプロメテウスの含意について、新たな眺望を得ることをめざします。

ロマン派とプロメテウスといえば、ゲーテの戯曲断片『プロメテウス』(1773)、詩「プロメテウス」(1774)をはじめ、バイロンの「プロメテウス」(1816)、『マンフレッド』(1816-17)、シェリーの『縛めを解かれたプロメテウス』(1822)、ベートーベンのバレエ音楽『プロメテウスの創造物』(1810-11)、さらに絵画と枚挙にいとまがありません。圧制に抗い、精神の自由を希求するプロメテウスは、「18～19 世紀初頭ロマン派と革命支持者を魅了してやまない神話」（カラン）ですが、必ずしも一枚岩的なプロメテウス像があった訳ではありません。男性詩人のプロメテウスは、アイスキュロス(B.C.525-B.C.456)を祖型に、自恃と反逆精神に満ちた理想的自画像であったのに対して、女性詩人・作家のプロメテウスは、多様です。ウルストンクラフトは、「理性という天上の火」を盗む自らをプロメテウスに準え、自叙伝的小説では、夫という暴君に抗う妻をプロメテウスを想起させる姿で描きました。また、レティシア・エ

リザベス・ランドン（1802-38）は、先輩詩人F・ヘマンズ(1793-1835)に捧げるエレジー「フェリシア・ヘマンズ」(1838)で、女性詩人が味わう苦悩をプロメテウスの苦悩に重ねました。

一方、メアリ・シェリーの「現代のプロメテウス」は、人類の創造者であると同時に、病と死から人間を解放しようと目論みながら、最終的に禍、死と破滅をもたらすという点で、シェリー・バイロン・サークルの中では異色であり、むしろクルックシャンクの諷刺画『現代のプロメテウス』(1814)に通底するものです。クルックシャンクは、圧制からの解放者という期待を集めながら、最終的には自ら圧制者に堕したナポレオンを、「現代のプロメテウス」として描きました。メアリとクルックシャンクに共通するのは、プロメテウス神話に、旧体制への挑戦者、新時代の開拓者に潜む傲慢という陥穽を見る点です。さらにメアリのプロメテウスは、科学とテクノロジーによる自然支配を「プロメテウス主義」と呼び、原子力を「プロメテウスの火」に準える現代、その先見性が際立ちます。

このようにロマン派のプロメテウスは、実に多様な姿をもっています。やがてヴィクトリア朝に向かう1833年には、エリザベス・バレット・ブラウニング(1806-61)が、1866年にはジュリア・オーガスタ・ウェブスター(1837-94)が、アイスキュロスの『縛められたプロメテウス』の翻訳を試みています。こうした動向も視野に入れ、時代のプロメテウス熱を検証していきます。

司会は、アルヴィ宮本なほ子氏（東京大学)、パネリストは廣野由美子氏（京都大学)、そして阿部（立命館大学）がつとめます。今年の大会は、十二月一日、京都の立命館大学衣笠キャンパスで開催いたします。紅葉の余韻ののこる京都で、みなさまのご参加をお待ちしております。

2017 Symposium (December 2, 2017, University of Tokyo)

The Scientific Shelleys

NIINA Maumi, Moderator and Response	新名　ますみ（司会･レスポンス）
YONETA Lawrence Masakazu	米田　ローレンス　正和
SUZUKI Rina	鈴木　里奈
UKI Ken'ichi	宇木　権一

「Shelley＋Mary＋科学」の新たな解答

司会 新名 ますみ

Percy Bysshe Shelleyと科学という関係は、長く研究されてきた題材である。Carl Graboがいみじくも彼を“a Newton among poets”と表現してから一世紀近くが経つ。Shelleyが当時花開き始めた近代科学に心酔し、作品中に積極的に取り入れたことは、今さら語る必要もないだろう。当時の科学の何が彼の作品のどの部分に反映され、それがどのように詩と調和したかということも、十分に研究されてきたと言える。片やMary Shelleyにおいても、*Frankenstein*の中で科学の暴走という危険性に着目し、それが現代への警鐘となっているという解釈は、周知のものである。

それでは、二十一世紀初頭に生きる我々が、さらに彼らと科学について語る意味とは何であろうか。現在、科学はますます進歩し、人は遺伝子の領域までに踏み込み、Maryの描いた生命創造までを予見させるような段階に至っている。人間が自分の存在意義を見失いそうなこの時代にあって、我々がなすべきことは何であろうか。改めてMaryの予言に怯えることか。それとも、Shelleyが作品の中でなし得た調和に見習い、精神世界と科学を融合することなのか。

ここで思い至らなければならないのは、Shelley たちの時代においては、科学が今とは違う意義を持って存在していたという事実である。当時、科学はまだ未発達で未分化の状態にあり、それゆえ人々は科学に対してはるかに無邪気であった。次々となされる発見や証明が世界をよりよい方向に導いてくれることに、現代より疑いを持っていなかった。科学に対するこの無垢な信奉こそが、Shelley に詩と科学を調和させたのだとしたら、現代の我々は彼の詩作の価値を減ずるべきだろうか。またその一方で、無邪気な時代にあってなお科学の危険性を察知した Mary を、予言者として褒め称えるべきなのだろうか。

その答えを得ることこそが、彼らと科学の関係を研究し続けていく意義の一つと言えるだろう。Shelley と Mary の姿勢が時代精神に左右されているのだとすれば、何にも限定されない普遍的な価値はどこにあるのか。科学全盛の現代が抱える不安にも耐えうる、科学との恒久的な関係は二人の中に見いだせるのか。それを探るためには、科学を扱う上での視野を広げ、様々な方向から検討していくことが必要となる。彼らの時代に限局しない科学の概念を得ること、個人対科学という関係だけに留まらず広く比較していくこと、更には科学の定義そのものでさえも問い直すという段階を踏まねばならないだろう。

その視野の広がりを考慮して、シンポージアムには三人のパネリストをお招きした。米田ローレンス正和氏には Shelley を中心に、鈴木里奈氏には Mary を中心に、そして、宇木権一氏には科学者としての立場から言及していただく予定である。視点を三点にすることで、Shelley と科学、Mary と科学という一対一の関係だけではない視点が生まれることを期待したい。いわばお三方に三角形を構成していただき、その三つの頂点の相互作用から、無邪気な科学信奉者 Shelley でもなく、単なる予言者 Mary でもない普遍的な存在意義を探っていきたいと思う。最後にフロアとのやり取りを通して三角形の上に三角錐が築かれ、その頂点が求めた答えの一部でもなせば幸いである。

（にいな・ますみ：慶應義塾大学）

The Scientific Shelleys: A New Solution to the Sum of Shelley, Mary, and Science

Masumi Niina

The relationship between Percy Bysshe Shelley and science has long been a topic of interest and was first discussed in the memoirs of his friends. Of course, Shelley was fascinated by the science of his time, many aspects of which he successfully integrated into his poetry. Moreover, his wife, Mary, famously focused on the unmanageability of science in *Frankenstein*, a potent warning for modern times.

What, then, is the point of further study of the Shelleys and science, particularly in the twenty-first century, when science is vastly more advanced than in their time? In their time, people believed that science would change the world for the better. In the context of that naïve belief, the Shelleys' desire to unite science and poetry seems entirely ordinary, and Mary's role of a prophetess even greater. We all know, however, that is not how they should be valued.

The problem is that any evaluation tends to be swayed by the zeitgeist of the age. When adhering to our modern way of thinking, or to that prevalent in the Shelleys' time, we easily lose sight of what Shelley and Mary really are. There should be ever-lasting significance, restricted to no age, in the relationship between the Shelleys and science, as their perspective offers important lessons in reconciling ourselves to science.

For that purpose, three panelists have been invited to the symposium. Together, they offer a new and broader perspective from which to appreciate more comprehensively the Shelleys' perspective on science. Masakazu Lawrence Yoneta will focus on Shelley, Rina Suzuki on Mary, and Ken'ichi Uki will

speak from the perspective of a scientist. Their insights into the universal truth of the Shelleys' views on science, which will help us live harmoniously in our time. (Keio University)

「イデア」と「プリンキピア」の交錯 — シェリーにおける「自然」の表象

米田ローレンス正和

Percy Shelleyの科学言説がそれ自体で研究対象として成立するようになったのは、ロマン主義研究において「歴史化（historicisation）」が始まった1980年代以降である。Shelley研究における「歴史化」の先駆者となったTimothy Mortonは、*Shelley and the Revolution in Taste*（1994）において、Shelleyが生涯を通じて実践し続けた「菜食主義（vegetarianism）」は単なる個人の性癖ではなく、革命期ヨーロッパの食文化において広く見られる現象であったことを明らかにした。同様に「歴史化」を標榜したSharon Rustonは、*Shelley and Vitality*（2005）においてShelleyの医学言説を分析し、彼の作品において描かれる「生物（organism）」のイメージが同時代イギリスの医学の定義する「生命（vitality）」の本質と一致していることを証明した。実に、長らく等閑に付されてきたShelleyの科学言説は、「歴史化」という批評的営為を通じて、ロマン主義時代の社会的・文化的コンテクストへと組み込まれるに至ったのである。

しかし、Shelleyの科学言説を歴史化するコンテクストはロマン主義時代のイギリスに限らない。18世紀後半から19世紀前半にかけてのヨーロッパでは、「第二次科学革命（the Second Scientific Revolution）」が進行していた。古典形而上学に基いて森羅万象の本質を探究する「自然哲学（natural philosophy）」は、啓蒙思想の興隆と市民社会の発達を通じて徐々に実証的な学問へと——すなわち、物理世界の因果関係を分析・記述する「自然科学（natural science）」へと変容する途上にあった。本発表では、「第二次科学革命」の時代にShelleyの科学言説における「自然」がどのように表象されているか詳細に分析する。

(よねた・ローレンス・まさかず：白百合女子大学)

Shelley the 'Romantic' Scientist: Publicising Secular Ideology in *Queen Mab*

Lawrence Masakazu Yoneta

In what ways was Percy Bysshe Shelley seen as 'Romantic' scientist? To answer this question, Timothy Morton restored Shelley's 'green' writing to its socio-cultural context, and thereby successfully reconstructed what may be called Shelley the Romantic Ecologist. Sharon Ruston further broadened the contextual horizons of Shelleyan science by reintegrating the poet's organic imagery into contemporary British 'vitalist' discourse. Shelley the Scientist, however, manifests itself as a typically 'Romantic' phenomenon in yet another context: the popularization of scientific knowledge.

Early-nineteenth-century Britain indeed witnessed a scientific revolution. The rapidly expanding middle class transformed Great Britain into a 'scientific community' in which independent amateurs engaged in entrepreneurial activities,

communicated their results to local specialist societies, and publicized their original findings through the then proliferating print media. And a newly literate 'reading public' participated in this burgeoning community as avid consumers of 'commodified science', enjoying ready access to the latest research by way of club talks, public lectures and circulating libraries. Thus, the revolution in scientific research was synonymous with the popularization of science.

Shelley's earliest career was also implicated in the Romantic scientific community. After being expelled from University College, Oxford, the troubled young poet determined to relaunch his career as a surgeon in London. He moved in Lincoln's Inn Fields with his cousin Charles Grove, who had recently began medical training at St. Bartholomew's Hospital. Shelley was soon introduced to Sir William Lawrence and other medical men from Bart's Medical and Philosophical Society. He also began to attend John Abernethy's anatomical lectures delivered within the hospital.

After dabbling in the medical profession for only one year, Shelley joined William Godwin's radical circle in Bracknell. Among the members of this circle was John Frank Newton, author of the vegetarian tract, *The Return to Nature*. Newton's secular naturalism inspired Shelley's missionary zeal for enlightening his English people through vegetarian diet. And the poet, while practicing 'proselytising' vegetarianism by himself, composed his first major poem *Queen Mab* and then wrote his first medico-political treatise, *A Vindication of Natural Diet*, whereby he attempted to propagate his secular ideology among the educated class. (Shirayuri University)

Frankenstein に見る自然科学と決定論

鈴木里奈

啓蒙思想が全盛に達した 18 世紀後半のヨーロッパにおいて、自然科学の進歩は人間の悟性の無限の可能性を証明するものであった。急進的社会思想家である William Godwin にとって、科学とは、*Political Justice* (1793)において展開した、啓蒙による人間の無限の進歩・改善の可能性、すなわち、「完全可能性(perfectibility)」論を支えるものであり、また、森羅万象が物理的因果の法則に支配されているとする「決定論 (necessitarianism)」の土台でもあった。

自然科学は観察や分類、例外の排除といったアプローチによって、自然界を支配する「必然の法則(the law of necessity)」を明らかにする。その進歩は、これまで偶然や超自然、奇跡と捉えられてきた事象を徐々に消滅させ、森羅万象から神の存在を切り離していく。Godwin は、科学的アプローチによって、人間の精神の働きをも根本原理へと整理することができるとし、それが自然科学の役割であると考えた。科学的手法によって、精神と道徳の世界における「必然の法則」を見つけ、人間の心の作用の規則性・因果性を把握することができれば、人間はそれを応用することでさらに意識的、理性的な存在となる。

Frankenstein (1818)の世界も「必然の法則」に支配されている。Mary Shelley はそれを自然界の事象の連鎖に、また Victor と被造物の精神の作用の連鎖の中に描き出す。しかし、その必然の連鎖は人間の無限の進歩に繋がるものではない。物語を取り巻く必然の連鎖は、Godwin が「不規則な事象」や「偶然」と呼ぶ予測不可能な出来事や心の作用によって不意に、そして繰り返し、転換させられる。Mary が描く世界を支配する法則は、決して科学的アプローチで解明されるものではない。Mary は、自然科学を土台とする唯物論的必然に人間の精神の作用を把握、やがてコントロールさせようとする試みの限界を提示している。それは近代科学者 Victor が、自然科学を駆使して生命の法則を暴いた結果生み出す怪物と悲劇に投影されている。

本発表では、*Frankenstein* が、自然科学に人間の精神と道徳の世界を支配する力を与えようとした

Godwin の急進的哲学への警鐘の物語であり、理性の批判的考察に耐えられるものだけを真理とし、森羅万象から神の存在と力を切り離そうとした合理的科学への警鐘の物語であることを論じ、それを Mary の宗教観に発展させていきたい。

（すずき　りな：　同志社女子大学）

Natural Philosophy and Necessitarianism in *Frankenstein*

Rina Suzuki

Mary Shelley's *Frankenstein* (1818) is considered to be a challenging work written in the spirit of the school of the author's father, William Godwin. A radical philosopher and distinguished novelist, Godwin exerted a great influence on British society and intellectuals in the 1790s, when Britain saw the struggle for social reform and expansion of individual liberty. His new philosophy espoused in his *Political Justice* (1793) became one of the most influential and controversial intellectual strains in the period of the pre-post French Revolution. Showing the resonance of that new philosophy and echoing its moral significance, *Frankenstein* demonstrates Mary's great debt of intellectual and philosophical dimensions to his works and ideas. Though referred to as a Godwinian novel, *Frankenstein* is hardly loyal to Godwin's philosophy. In fact, the novel is the product of a critical reappraisal of his principal theoretical tenets. Through her speculation on the decline of revolutionary ideas in the early nineteenth century and her hard experiences in the real world, Mary gradually formulated some queries about Godwin's radical theories. In *Frankenstein* she examines her doubts regarding her father's ideas and explores her views on human nature, the individual's potential for moral improvement, and the possibility of social reform.

In *Political Justice*, Godwin focused first on presenting his underlying assumption that improvement of social conditions should necessarily accompany the improvement of human beings. He engaged in inquiring as to the mode in which human happiness and moral improvement might most successfully be introduced into society, denouncing the accepted dogmas and the various political institutions that were obstacles to human improvement. Additionally, he introduced the progressive idea of human perfectibility. Central to the whole philosophical theory in *Political Justice* is the doctrine of necessity, according to which human beings are the offspring of their circumstances and have no innate character or ideas. As all the workings of material universe are strictly subject to the law of necessity, the operations of human minds and all resulting actions are also determined by, or occur according to, that law, and therefore are inevitable. That assumption leads to the denial of human free will. Under the law of necessity, if their social and educational conditioning is properly favorable for enlightenment, individuals are all perfectible; in other words, they are amenable to perpetual improvement in morality and intellect. The amelioration and progress of society could lead to the perpetual improvement of humankind, and vice versa. The doctrine of necessity and the science of human nature are prominent among the philosophical theories of Godwin's which Mary reevaluates in her novel.

In Europe, the second half of the eighteenth century was a period of intellectual, social and political ferment, the time referred to as the Age of Enlightenment. The intelligentsia saw infinite possibilities of human intellect in the rapid progress of natural sciences. To Godwin, the progress of science served as the grounds of the idea of human perfectibility as well as of the doctrine of necessity. Discovery of the universal laws of nature encouraged Enlightenment philosophers' aspirations for domination of the natural world, allowing them to entertain the lofty ambition of governing human beings and the whole social system through discovering the principles of causation that control the operations of human minds. Like other Enlightenment thinkers

including David Hume, Godwin adopted a Newtonian scientific approach to advance the science of human nature; he tried to observe events in the human mind, track the frequency of their occurrence, and organize them into classes, excluding the appearance of irregularity, finally establishing a general idea as to the universal laws governing the human mind and the moral world. Through employing those laws for moral enlightenment, a human can be a more rational being, he thought, a new man on the high road toward perfectibility.

Frankenstein is a manifestation of Mary's critical reassessment of the doctrine of necessity and the science of human nature, which Godwin refers to as "human science" in *Political Justice*. That is indicated in the creation by Victor Frankenstein, an enlightened natural philosopher, of a monstrous rational being and the ensuing tragedies. Victor adopts the Newtonian and Godwinian scientific approach in the unsuccessful attempt to create a human being in perfection. The creature he regards as an "abortion" turns out to be a being who destroys the dream of a new man embodying human perfectibility. Made with the utmost use of natural sciences, the creature deviates from the universal laws of nature. The inherent contradiction in his monstrous being results in his lifelong agony. The creature's innate deformity, which is certainly an offspring of necessity, is an irremediable defect beyond the reach of human ingenuity to modify. It hinders his moral improvement and leads him to blight his virtues, which are also the necessary products of his conditioning. The sequence of events demonstrates Mary's distrust of Godwin's faith in human science. Simultaneously, the creature's deformity, which he believes is the offspring of irresistible fate, is indicative of her profound apprehension toward the conceited nature of his attempt to discover and exploit the universal laws of necessity in the realm of human mind and morality. His hideousness also reflects her antipathy towards the scientific understanding of human beings and the attempt to dissect their minds through the scientific approach.

While showing skepticism about the idea of human perfectibility founded on the progress of human science, Mary also voices doubts as to the doctrine of the materialistic law of necessity Godwin advocated in *Political Justice*. The world of *Frankenstein* is governed by the deterministic chain of necessity. That is discernible not only in the chain of events in the natural world but in the operations of protagonists' minds and their accompanying acts. The law of necessity governing the world of *Frankenstein*, however, brings forth no chains towards human moral improvement and happiness. It continues to produce yet another chain of malevolence and misfortune. More significantly, the law of necessity is often overturned by events that never allow individuals to predict or make logical deductions. The operations of the protagonists' minds are frequently subject to the unpredictability that Godwin regards as the interference of irregularity and chance and that he believes is to be necessarily eliminated as human science advances. The unpredictability is reflected in the chain of the workings of the minds of Victor and his creature which are often swept away by inexplicable, violent emotion and passion. That demonstrates Mary's skepticism about the possibility of scientific understanding of human beings and of the establishment of the universal law of necessity controlling their minds.

The law of necessity in Godwin's theory assumes the character of materialism and atheism, admitting no interference of the Will of God in the chain of events in the universe. It conveys the essentially secular scientific notion that a human is a mechanistic being with no free will, operated on by external forces. Every event in mind as well as in the material world is only a link in the materialistic chain of necessity. The notion frees human beings from religious dogmas including the superstitious belief in original sin, simultaneously liberating them from the need to seek the protection of God and redemption. The progress of secular enlightenment, science of human nature, and the doctrine of necessity grant individuals the ability to pursue human perfection not in Heaven but in the earthly world. Mary delineates her intensifying concern about the secular doctrine of necessity in *Frankenstein*, which is discernible especially in the

miserable condition in which the creature finds himself and in his strong desire for salvation. Regarding his own being as an offspring of materialistic necessity, the creature continues to seek salvation throughout his life. He identifies with Adam and entreats Victor the creator to help him out of his misery which is owing to his origins. His innate defect is reminiscent of original sin with his yearning for salvation reflecting human longing for atonement and divine grace.

The human science Godwin put forward in *Political Justice* transformed a human being under the law of necessity into a machine with no internal engine. It led individuals to entertain the notion that every event in the universe dispense with divine will. It also made the existence of human beings less significant and uncared-for through depriving them of the idea of the grace of God. The distress and misery the creature suffers and his desperate quest for salvation issue a warning against the pursuit of secular human science and the materialistic doctrine of necessity which makes a person a being of reduced significance in the universe. They are indicative of Mary's critical view of the notion that a human is a passive, mechanistic being. They also seem to reflect her longing for the law of necessity that assumes a benevolent tendency according to divine will. *Frankenstein* is the product of Mary's attempt to evolve her views as to the law of necessity governing the universe and attain new understanding of human nature and what human life calls for under the law.

(Doshisha Women's University)

The Tempest of the Shelleys: A Wind of Lucretius' Atomism

宇木　権一

Percy/Mary Shelley が生きた時代は、Boyle や Newton 等が築いた近代原子論の基礎の上に Laplace、Lavoisier や Davy、Faraday が活躍し、思弁的な Natural Philosphy が実用的な Science へと急速に発展した時代である。

この発展の背後には、原子論復活の契機となった、600 年前 Poggio Bracciolini が再発見した科学詩 *De Rerum Natura* があった。この詩は、古代ギリシャの Democritus や Epicurus 等の原子論を人々に啓蒙するために古代ローマの Lucretius が書いたものであり、2000 年以上前に科学的原子論を考察した先見性に注目される事が多い。しかし、現在の科学書とは大きく逸脱した部分も多く、特に詩の形式と Climamen の概念の二点が挙げられる。本発表では、この二点の逸脱を中心に、Lucretius への引用も多く決定論的思想の強い Percy Shelley の *Queen Mab* と、原子論的発想による生命創造を描いた Mary Shelley の *Frankenstein* を取り上げて、その影響を考察する。

一点目の逸脱は、科学と親和性の低い詩の形式を取っている事である。これには、人々に身近な詩の形を取る事で原子論を広める意図があり、その詩の美しさは Vergilius にも影響を与えたほどである。現代的観点では対立する様に見える詩と科学が調和した作品と言えるだろう。科学的哲学的な主題を詩で表現する方法は、"A Philosophical Poem"の副題を持つ *Queen Mab* にも引き継がれ、また後の *A Defence of Poetry* における詩と科学の調和の理想にも影響を与えている。一方、科学的知識を基礎として哲学的なテーマを追及し、散文と詩の違いはあるが簡素な言葉でまとめる点では、Science Fiction 的とも言える。その点で、SF の元祖と称される *Frankenstein* とも類似しており、作中で描かれる Monster と Victor の対立は詩と科学の調和に対する影とも捉えられるだろう。

二点目は原子の微小な偏移 Clinamen の存在である。全てが原子から構成され自然法則に従う原子論

を突き詰めると、Laplace's Demon に類される決定論や生命を Automaton と見なす様な自由意志への否定へと行き着く。現に、Epicurus の師に当たる Democritus も決定論的立場を取っていた。それを回避する術が Epicurus が提唱し Lucretius が引き継いだ、原子の微小な偏移 Clinamen の概念である。わずかな原子のずれにより原子同士が衝突して様々な自然現象が発生し、ひいては決定論から逸脱する生命の意志が生まれると考えたのである。例えば、一陣の風による原子のずれが Tempest さえも巻き起こすのである。この概念により、自然法則に従う原子論と自由意志をが両立する非決定論的科学が成立する。

Queen Mab では、Godwin の Necessity 等の影響も受けた科学的決定論を主軸にしながらも、意志の自由を描く点が矛盾であると指摘されているが、Clinamen の存在によって両立可能である。

Frankenstein においては、原子論的な Monster の創造過程よりも、Creator が定めた運命から逸脱する Monster の反逆が中心に描かれており、Clinamen から生じる Tempest の物語と言えるだろう。

Lucretius の *De Rerum Natura* 再発見から 600 年の節目に当たるシンポジウムを通して、両 Shelley 研究のみならず、現在、深刻化している詩と科学の二つの文化の対立における新たな観点が生まれる事を期待したい。

（うき　けんいち：　物理系技術者）

The Tempest of the Shelleys：A Wind of Lucretius' Atomism

Kenichi Uki

In the times of Shelley and Mary, the scientists including Laplace, Lavoisier, Davy and Faraday were actively engaged in expanding the foundations of modern atomism built by Boyle and Newton. Their achievements rapidly transformed speculative natural philosophy into practical science.

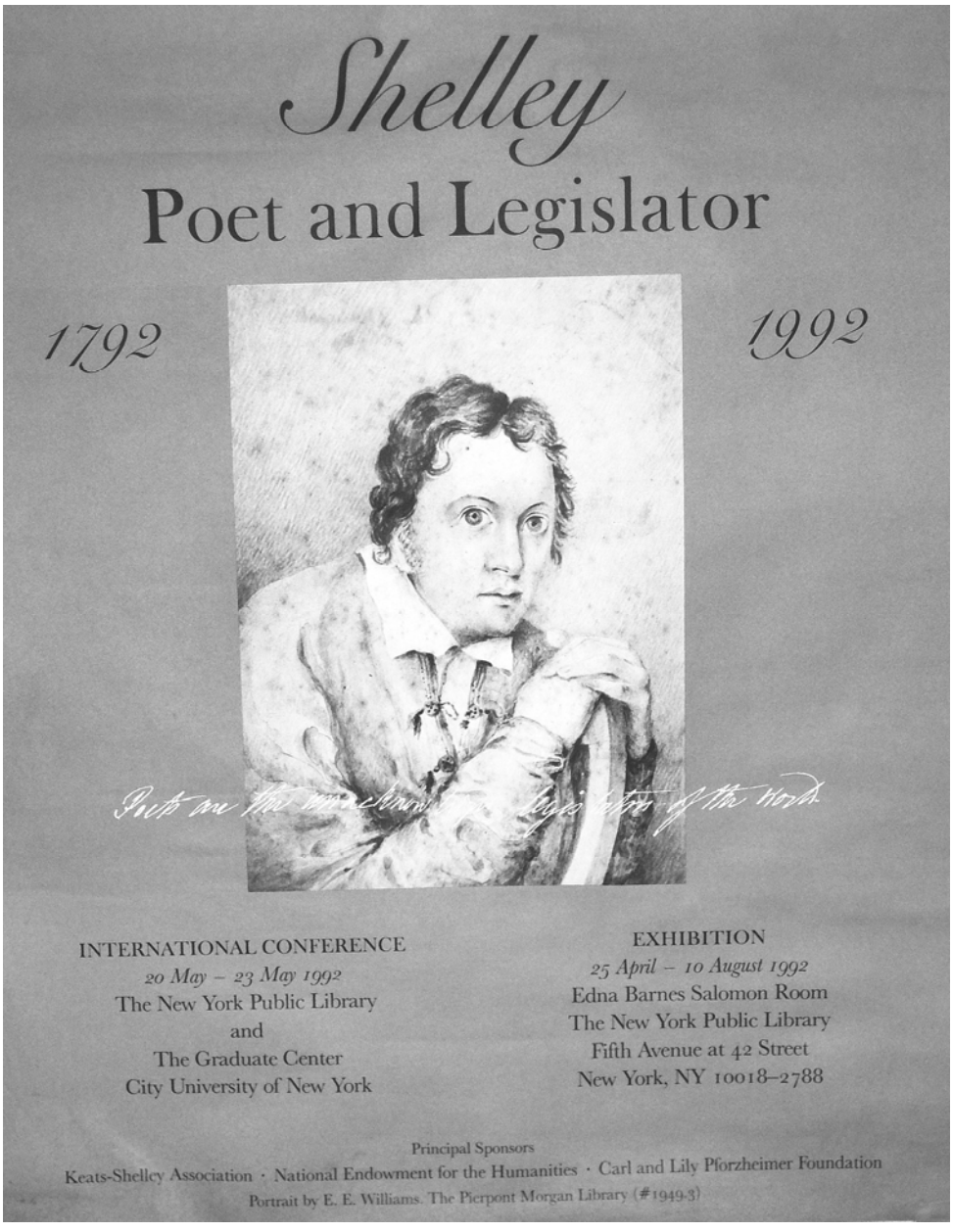
This Newtonian “renaissance of atomism” coincided with a poem on science by Lucretius, *De Rerum Natura*, rediscovered six centuries ago. Lucretius, a poet and philosopher in ancient Rome, wrote it more than 2000 years ago to draw people’s attention to Epicurus' atomism. But it significantly departs from modern scientific texts in its poetic style and concept of *clinamen*. I investigated the influence of these aspects of Lucretius' work on Shelley's *Queen Mab* and Mary Shelley's *Frankenstein*.

The first feature is the poetic style, which had little affinity with science. Lucretius’ intention was to spread atomism in a form popular to his contemporaries, and the beauty of his work was admired even by Vergil. His poetic form successfully harmonized poetry and science, which seem to be impossible in our time. This method was adopted by Shelley in *Queen Mab*, which bears the subtitle "A Philosophical Poem," and influenced his ideas in *A Defence of Poetry*, as regards to the harmony of poetry and science. In its suggestion of a philosophical theme based on scientific knowledge, Lucretius' poem is similar to *Frankenstein*, which is regarded as the first work of science fiction. Indeed, the antagonism between the Monster and Victor can be seen as a shadow cast over Shelley’s effort to harmonize science and poetry.

Lucretius' second feature is the concept of *clinamen*, the minute "swerve" of atoms. Atomism maintains that all things are made up of atoms and obey natural laws, and thus it ultimately leads to determinism, e.g., the reign of Laplace's demon and the denial of free will, as evidenced by his regarding all living things as automatons. However, the idea of *clinamen* led Lucretius to reject determinism. In his view, minute atomic swerves cause atomic collisions, which bring about various natural phenomena, thus it allows the possibility of free will. For example, a micro-atomic swerve caused by a mere gust of wind could cause a macroscopic tempest. Thus, a non-deterministic science is established in which atomism and free will are compatible. Although

Queen Mab seems to contradict itself by advocating free will in the context of scientific determinism, such as Godwin's idea of Necessity, it is nevertheless consistent with the idea of *clinamen*. In *Frankenstein*, the Monster's rebellion is a kind of divergence from the fate decided by its creator and can be regarded as a tempest caused by *clinamen*.

On the 600th anniversary of the rediscovery of Lucretius, I wish to offer this presentation as a gust of fresh wind that blows through the two divides of poetry and science beyond their seemingly intractable opposition. (Engineer)



"Shelley: Poet and Legislator 1792-1992" (New York Public Library, 1992)のポスター
(p. 23 記事)

Plenary Lecture given at 26th Annual Conference

A Reading of Shelley's *Ode to Liberty*

Nobuo Yoshioka

The first and last stanzas of *Ode to Liberty* serve as prologue and epilogue to the rest of the stanzas. The prologue begins: "A glorious people vibrated again/ The lightning of the nations: Liberty/ From heart to heart, from tower to tower, o'er Spain,/ Scattering contagious fire into the sky,/ Gleamed" (I. 1–5).

The poet hails the Spanish revolution with a reflection that any revolution or reform in a nation, which, as the second sentence suggests, is an even inspired and guided by Liberty. She transmits the effect to the other nations, so that revolutions recur at intervals of months, years, centuries, or a millennium in between, as the poet soon goes on to recount chronologically: first in ancient Greece (III–VI), second in ancient Rome (VII–VIII), followed by more recent and current repetitions (IX–XIV) and probable and wished for future repetitions (XV–XVIII). These repetitions, each more or less varied, like a scene in a drama or an episode in an epic, are at once an interesting and serious story.

Now, what does "vibrated" mean? Ellis's concordance gives "brandished" for its sense. The word "brandish" is defined in OED: "1c. To flourish about, move vigorously (the limbs, the head, etc.)," but "vibrated" had better be taken in its more usual sense, because, firstly, vibration more easily associates itself with thunder that may accompany "the lightning"; and secondly, a definition in OED: "Vibrate II. 7. B. To emit, give forth, send out (light, sound etc.) by, or as by, vibration or vibratory motion" is more direct and explicatory to the context. Thus, the "lightning" has two aspects, visual (lightning) and vocal (thunder): "the ray/ Of the remotest sphere of living flame" (11–12) and ("the Spirit's whirlwind [from its station in the heaven of fame]" (11) and "A voice out of the deep" (15).

Next, where was the poet when he knew of the revolution? His whereabouts are seen more clearly in XIII. He had long lain asleep in a vale on the steep of a snow-covered mountain—like Prometheus, "bound to the precipice," "eyeless in hate," on "a ravine of icy rocks in the Indian Caucasus" (Act I)—not alone, but there seem to have been a few others, till he was awakened and bewildered now, like a few around him—Liberty-philes or reformers. "My soul spurned the chains of its dismay,"—perhaps the "chains" were of ice—"And in the rapid plumes of song/ Clothed itself, sublime and strong / As a young eagle soars the morning clouds among/ Hovering in verse o'er its accustomed prey." His soul did not *make* but hear or clothe itself in "the plumes of song." The definite article implies that they were already there; they rather worked as a moving force for his soul like "a young eagle," spurning "the chains of its dismay," soaring high "the morning clouds among" to eat breakfast (which means for "a young eagle" to join the chorus that the rebels were singing in Cadiz). At dawn, heated by the fire and sound scattered by the sun-like Liberty, the seas, rivers, and frozen vales were breathing up vapour, as is echoed in the sentence "O'er the lit waves every Aeolian isle…/ Howls, and leaps, and glares in chorus" (XIII 3–5). This vapour or dew, rising vigorously and melodiously, becomes "the morning clouds." His soul itself *is* such a water drop or dew, as are the few liberty-philes or sympathizers around him and all others that remain below on land and waves. "The morning clouds" are now "hovering" in the bright blue sky, chanting ardently and jubilantly for Liberty.

Thus, this passage is equivalent to the first and second sentences, and so are the following sentences: "(Till) from its station in the Heaven of fame/ The Spirit's whirlwind rapped it" (4); "[and] the ray/ Of the remotest sphere of living flame/ Which paves the void was from behind it flung" (5)—"the voice"/"the ray" of the sun-like liberty, driving out night's silence/darkness, "rapped" his sleeping soul; the poet was one of those affected by the "contagious fire"/"the plumes of song."

The next phrase is also equivalent to the above four: “As foam from a ship’s swiftness” (6). The “foam” may be clouds surrounding Liberty which is a ship, i.e. “the ray”/ the “song” passed flashing/blasting through, and which, dispersing yet flowing in the wake of the ship, fall over him from behind like a lot of ninepins, echoing the melody. He finds himself joining the chorus: “[When] there came / A voice out of the deep: I will record the same” (7).

Remarkably, stanza I comprises seven statements that reemphasize one another. In other words, the main theme “A glorious people vibrated again/ The lightning of the nations” is followed by six equivalent variations.

The last word of the prologue marks the beginning of the main part: the “voice” goes on to narrate or sing of Liberty’s visits to the nations, followed by the poet recording the words, till “The solemn harmony/ Paused” (XVIII– XIX), the epilogue begins.

The epilogue is comprised of sentences and phrases that are in agreement, reverse or static to the image of soaring motion in the prologue comparable to strophes and antistrophes of the Greek choral composition. “The solemn harmony/ Paused” is a stasis, since Liberty has arrived at the final point in her travel, in other words, the voice has finished singing, and she will return to where she came from, i.e. “the remotest sphere of living flame” or “its station in the Heaven of fame.” “[T]he Spirit of that mighty singing” is a strophe. “To its abyss was suddenly withdrawn” is an antistrophe. “Then, as a wild swan, when sublimely winging/ Its path athwart the thunder-smoke of dawn,/ Sinks headlong through the aerial golden light/ On the heavy-sounding plain,” is regarded an antistrophe. “When the bolt has pierced its brain” is a strophe. “My song, its pinions disarrayed of might,/ Drooped” is an antistrophe. Likewise, “—o’er it closed the echoes far away/ Of the great voice which did its flight sustain,” an antistrophe. “As waves which lately paved his watery way/ Hiss round a drowner’s head in their tempestuous play”: a stasis. This is a closing remark: Clouds i.e. Liberty-philes, dissolving in rain-drops, fall onto the waves of the ocean, i.e. merge into the general public.

The original repetitions are narrated in III–V (ancient Greece). With the Earth’s groan as driving force, mankind grew up gradually; “The spirit of the beasts” was kindled...” “Man, the imperial shape, then multiplied/ His generations...”; “palace and pyramid/ Temple and prison,” “Anarchs and priests” developed; “yet a speechless child,/ Verse murmured, and Philosophy did strain/ Her lidless eyes for thee; when o’er the Aegean main/ Athens arose: a city such as vision / Builds from the purple crags and silver towers/ Of battlemented cloud, as in derision Of kingliest masonry:.../ A divine work!” inheriting from the grandfather, “This divinest universe,” divine properties such as purple crags,” “silver towers of battlemented cloud,” “ocean-floors,” “the evening sky,” “thunder-zoned winds,” “sunfire,” abstracted by “vision” i.e. “Philosophy”, child of “Man” and earth. Finally, “Athens diviner yet, / Gleamed with its crest of columns, on the will / Of man, as on a mount of diamond, set;/ For thou wert, and thine all-creative skill/ Peopled, with forms that mock the eternal dead/ In marble immortality, that hill/ Which was thine earliest throne and latest oracle.”

“The will / Of man” corresponds with “the human spirit’s deepest deep” (IX. 11) and “Till human thoughts might kneel alone / Each before the judgement-throne / Of its own aweless soul, or of the power unknown! ... / Till in the nakedness of false and true / They [“the words”] stand before their Lord, each to receive its due!” (XVI. 6–15); and to include “My soul” (I. 5).

(吉岡信雄、 よしおか　のぶお)

パーシー・ビッシュ・シェリー散文のマルクス主義的分析

『アイルランド人民に告ぐ』*An Address to the Irish People* を中心に

元島　信矢

パーシー・ビッシュ・シェリー（1792-1822）はイギリス・ロマン主義を代表する詩人である。シェリーの作品は、『ひばりに』 “To a Skylark”などの極めてリリカルで美しい詩作品群が一方において有名であるが、もう一方において、当時のイギリスの社会問題や国家権力に対する激しい憤りを歌い上げた極めて政治的な作品群においても文学史に燦然とその名を輝かせている。

さらに、1980 年代のポール・フットによる *Red Shelley* (1981)を皮切りにして、19 世紀イギリスで発達した資本主義に伴う経済的な格差と労働者階級に対する搾取を鋭く糾弾した社会主義者の先駆けとしてのシェリー論がシェリー研究のひとつの潮流となっている。

シェリー作品群においては、プロレタリアートやブルジョワジーといった経済学的・マルクス主義的用語が直接登場するわけではない。なぜならシェリー自身は独裁・圧政からの人類の解放を主眼としており、シェリーの目指したものは貧者の経済的困窮からの解放という経済的側面に限られないからである。しかしながら、新保守主義的な傾向が強まり、資本家による労働者の搾取とそれに由来する貧困の問題が加速度的に悪化している 2018 年現在において、シェリーを社会主義的に読み解くことは大いなる示唆を与えてくれることは間違いないように思われる。

そこで本論文においては、剰余価値理論などを提唱し科学的社会主義を標榜したマルクス主義を分析視角としてシェリーの作品を読み解いていくことを目的とする。シェリーを愛読し、「もしもシェリーが長生きしていたら社会主義者になっていただろう。反動的ブルジョワから抜け出せなかったであろうバイロンとは違って」[1] と語ったマルクスの理論を使ってシェリーを分析することは、数ある社会主義の流派の中でもシェリーを読み解くうえで特に意義深い分析視角だといえよう。

そこで、まず第一章においてはシェリー作品を解釈するためにマルクス主義の代表的な理論をいくつかピックアップし、マルクス主義の特徴を示したうえで分析視角を提示する。

次に第二章においては、1812 年に書かれたシェリーの最初期の散文作品である『アイルランド人民に告ぐ』*An Address to the Irish People* (1812)を、本論文で分析するシェリー作品の中核作品として提示したい。[2] この作品は未だ最初期作品ゆえの荒削りさ、説明不足さが否めないとはいえ、シェリーの労働者解放の構想の雛型が現れた作品である。第三章以降で取り上げる作品は、本作品に現れたテーマをより発展させたり、より詳細な考察を加えたりしていると評価できる。すなわち、第三章以降の作品はすべて本作品の延長上にあるといって過言ではないのである。よって第二章においては本作品に絞って考察を行い、マルクス主義的な観点からみた類似点およびシェリーの独自の特徴が現れた部分を解き明かしたい。

第一章　　分析視角

本論文においてはシェリー作品をマルクス主義を通じて分析していくわけであるが、マルクス主義を定義することは誠に至難の業である。そこで、ここではマルクス主義の定義はあえて示さず、シェリー作品を解釈するのに有効と思われるマルクス主義の理論・特徴をいくつか示そうと考える。

まず最初に、剰余価値理論とそれに伴う労働者階級の搾取の理論が重要である。剰余価値とは、「資本性的生産または賃金制度の基礎」である、「資本家によって何らの対価も支払われない」　価値である。

例えば、ある労働者が一日に三シリングの賃金で雇用されており、六時間の労働が三シリングの価値

を生み出すという場合を見てみよう。この労働者を使用する資本家は、この労働者を一日に六時間使用し、三シリングを労働者に支払い、三シリングの価値を受け取るのでは差し引きゼロで利潤を全く得られない。

そこで資本家は、この労働者を一日十二時間労働させるのである。すると資本家は、労働者が一二時間の労働で生み出した六シリングのうちから労働者に三シリングを賃金として支払っても未だ懐には三シリングが残るわけだ。このように労働者を余分に働かせたり、あるいは労働者の賃金を引き下げたりすることで、資本家は自らが支払った価値よりもより大きな価値を得ることができる 。この価値をマルクスは剰余価値として発見したのである。資本家が労働者をより長時間・高強度にこき使うことで、資本家はより大きな剰余価値を得て富み、それと引き換えに労働者は資本家に比して貧しくなる。これが資本主義的な搾取の構図である。

次に、労働者解放後の展望が重要である。エンゲルスは、労働者階級が勝利を収めることで階級差別・対立がなくなり、階級そのものが消滅するとした。エンゲルス曰く「プロレタリアートが国家権力を掌握すると、それがまず生産手段を国有にするのである。そして、こうすることは、プロレタリアートがプロレタリアートを止揚し、一切の階級差別と階級対立とを止揚し、そしてまた国家としての国家も止揚することである」。[5] さらに階級の消滅に伴って、国家もまた死滅するとした。「国家というのは、そのときどきの搾取階級の組織、その生産条件を外部からの攻撃に対して維持するための組織」であるため、「抑圧すべきいかなる社会階級も存在しなくなり、階級支配と従来の生産の無政府状態に立脚する個人の生存競争がなくなってしまえば」、非搾取階級に対する抑圧のための暴力装置たる国家の存在理由もまた消滅するのである。[6]　ここにみられるように、マルクス主義の労働者解放は国境に縛られないインターナショナルな人類の解放である。

最後に、マルクスは労働者解放の手段として暴力革命[7]を志向していた。彼は「あらゆる革命的叛乱は、（中略）革命的労働者階級が勝利するまでは失敗せざるをえないこと。およそ社会改造は、プロレタリア革命と封建的反革命とが世界戦争において武器をもって勝負を決するまでは空想たるにとどまる」とした。[8]

本論文では主に以上で挙げた 3 つのマルクス主義的な観点、すなわち剰余価値による労働者に対する搾取、インターナショナルな人類の解放、解放の手段としての暴力革命を通じてシェリーの諸作品を分析してみたい。

第二章　『アイルランド人民に告ぐ』
An Address to the Irish People

1　作品概要

『アイルランド人民に告ぐ』は、当時宗主国であったイギリスからの支配・経済的搾取と、少数者であるプロテスタントによる多数者のカトリックへの支配という二重の抑圧に苦しんでいたアイルランドの民衆に向けて書かれた散文である。アイルランド民衆への搾取という不条理な社会状況を貧しいアイルランド民衆自身に知らしめて、アイルランドの体制変革を促すことを目的としている。[9]

2　労働者に対する搾取

まず最初に、本作品はシェリーの最初期の作品にもかかわらず既にマルクス主義的な観点、即ち資本家・富裕層による労働者の搾取の問題に早くも言及している。この搾取に対する告発は、以下の部分に色濃く現れている。

> I have said that the rich command, and the poor obey, and that money is only a kind of sign, which shews, that according to government the rich man has a right to command the poor man, or rather that the poor man being urged by having no money to get bread, is forced to work for the rich man. . . .[10]

> 私がこれまで言ってきたことは富める者が命じ、貧しい者が従うということです。そしてお金というものはある種の印章に過ぎないということです。この印章によれば、富者は貧者に命令する権利を有するのです。いや、むしろ貧者は糊口を凌ぐお金もなく、富者のために働かざるを得ないのです。[11]

上の引用部分において、シェリーはアイルランド

の民衆を苦しめている大きな要因の一つが資本主義的な経済格差であることを告発している。しかしながら、本作品における搾取と貧困の問題の説明は簡潔かつ平易であり、アイルランドを取り巻く複雑な状況を説明し尽くすには充分ではない。しかしながら、貧しく教育水準の高くないアイルランド民衆にも容易に理解できる内容であることは確かである。[12]

3　労働者解放後の展望

次に特筆すべきは、本作品においては労働者解放の先に待つ展望が語られていることである。いわばシェリー的な理想郷（ユートピア）像である。

> I write now not only with a view for Catholic Emancipation, but for universal emancipation; and this emancipation complete and unconditional, that shall comprehend every individual of whatever nation or principles, that shall fold in its embrace all that think and all that feel, the Catholic cause is subordinate, and its success preparatory to this great cause, which adheres to no sect but society, to no cause but that of universal happiness, to no party but the people. I desire Catholic Emancipation, but I desire not to stop here, [...] the great and lasting one which shall bring about the peace, the harmony, and the happiness of Ireland, England, Europe, the World.[13]

> 私は今、〈カトリック解放〉のみならず、全人類の解放のための視野に立って書いています。この解放は完全かつ無条件であり、理性と感性を持ったあらゆる国や思想のすべての個人を包括するものなのです。カトリックの解放の大義は始まりに過ぎず、首尾よく行けば全人類の解放にもつながりうるものです。なぜならその大義は社会以外のいかなる派閥にも執着せず、人々以外のいかなる集団にも固執しないからです。私は〈カトリック解放〉を望んでいますが、私の望みはそれだけではありません。（中略）それは壮大でずっと続いてゆく、アイルランド、イングランド、ヨーロッパ、そして〈世界〉に平和と幸福をもたらすものです。[14]

シェリーは本作品と彼自身のアイルランドのカトリック解放運動への参加を通じて、搾取に苦しむアイルランド一国を救おうとしたのではない。彼の解放の対象は上に見るように全人類である。一国の解放にとどまらないこのインターナショナルな人類の解放という点において、シェリーはマルクス主義に相通じていたといえる。

しかし一方で、シェリー的なユートピア像はマルクス主義的な要素だけにとどまらない。マルクス主義にはないシェリーの展望の特徴が、次の部分に現れている。

> Can you conceive, O Irishmen! a happy state of society---conceive men of every way of thinking living together like brothers. The descendant of the greatest Prince would there, be entitled to no more respect than the son of a peasant. There would be no pomp and no parade, but that I which the rich now keep to themselves, would then be distributed among the people. None would be in magnificence, but the superfluities then taken from the rich would be sufficient when spread abroad, to make every one comfortable. — No lover would then be false to his mistress, no mistress would desert her lover. No friend would play false, no rents, no debts, no taxes, no frauds of any kind would disturb the general happiness: good as they would be, wise as they would be, they would be daily getting better and wiser. No beggars would exist, nor any of those wretched women, who are now reduced to a state of the most horrible misery and vice, by men whose wealth makes them villainous and hardened, No thieves or murderers, because poverty would never drive men to take away comforts from another, when he had enough for himself. Vice and misery, pomp and poverty, power and obedience, would then be banished altogether.---It is for such a state as this, Irishmen, that I exhort you to prepare.[15]

> アイルランドの皆さん！あなた方は幸福な社会像を思い描くことができるでしょうか――様々な考え方の人々が兄弟のように一緒に暮

らす姿を。偉大なる〈王子〉の後継者であっても、そこでは農夫の息子と同様の尊敬しか受けません。そこでは豪奢も盛観もなく、富める者が独占しているものが、人々に分配されるのです。豪奢な振る舞いをする者は誰もおらず、富者から取り上げられた有り余るほどのものがばらまかれ、人々を快適にするのです。――そうすれば男は女に不実を働くことはなくなり、女は男のもとを去ることはなくなります。友は友を裏切らず、賃貸はなく、負債はなく、税はなく、全体の幸福を妨げる欺瞞はなくなります。人々はもともとそうであるように善き人であり、賢く、日に日に更に善く賢くなります。物乞いも、また今では男たちによって性悪で冷淡にさせられ、最もおそろしく堕落してしまった女性もいなくなります。泥棒も殺人者もいなくなります。なぜならば充分に豊かであれば、貧困によって他者から奪うことを余儀なくされることはないからです。悪徳と悲惨、豪奢と貧困、権力と服従はすべてこの世から姿を消すのです。――このような状態にこそ、アイルランドの皆さん、私はあなた方に備えることをすすめるのです。[16]

I wish to impress upon your minds, that without virtue or wisdom, there can be no liberty or happiness and that temperance, sobriety, charity, and independence of soul, will give you virtue --- as thinking, enquiring, reading, and talking, will give you wisdom. Without the first, the last is of little use, and without the last, the first is a dreadful curse to yourselves and others.[17]

私があなた方の心に強調したいのは、美徳と叡智がなければ、自由も幸福もありえないということです。そして、美徳は節制、節酒、寛容、独立心によって得られるということです…そして叡智は思考、思索、読書、議論によって得られるということです。美徳なくして叡智は用をなさず、また叡智がなければ、美徳はあなた自身とあなた方に恐ろしい災いとなるのです。[18]

上の引用部分において、シェリーはマルクス主義的な財産の平等を唱えている。しかしながらシェリーの展望は経済的な部分に留まらず、経済的格差の撤廃の末に人々が精神的により善で賢くなることを提唱している。つまりシェリーは、人々の道徳面での成長を提唱した。この点はシェリーが師と仰いだゴドウィンの影響が大であることは確実である。[19] ゴドウィンが提唱した強烈なまでの理性に対する信仰はシェリーの思想形成に重要な影響を与えており、この影響がシェリーの展望にも如実に現れている。[20]「思考し、読書し、討論する」、また「美徳を備える」ことによる「自己変革」はシェリーの労働者に対する啓蒙において極めて重要なウェイトを占めており、次章の作品でも繰り返されている。

マルクスはもっぱら物質的・経済的な現状分析に重きを置き、労働者解放のその先のヴィジョンを詳細には示さなかった。労働者解放のあとに何が待っているかというヴィジョンを示した点において、シェリーはマルクスよりもより豊かなヴィジョンを思い描いていたという評価ができる。

4　労働者解放の手段

最後に本作品の特筆すべき点は、シェリーにとっての労働者解放の手段が示されている点である。そしてこの労働者解放の手段が、シェリーとマルクスとの決定的な違いなのである。それでは該当箇所を見てみよう。

It will be said, that my design is to make you dissatisfied with your present condition, and that I wish to raise a Rebellion. But how stupid and sottish must those men be, who think that violence and uneasiness of mind have any thing to do with forwarding the views of peace, harmony and happiness. They should know that nothing was so well-fitted to produce slavery, tyranny, and vice, as the violence which is attributed to the friends of liberty, and which the real friends of liberty are the only persons who disdain.[21]

要するに、私の目的はあなた方に現状に対する不満を感じてもらい、〈反乱〉を引き起こすということです。しかし、暴力にまかせて不安を巻き起こすことで平和や調和、幸福への道に進むことができると考える者は頭のおかしい愚

か者です。彼らは、暴力よりも隷属、専制、悪徳を生み出すのにふさわしいものはないと知るべきです。暴力は自由を求める同志たちに必要だとされていますが、真なる自由の同志たちは暴力を拒否する者たちなのです。[22]

マルクス主義は暴力革命の理論である。労働者階級が解放され、ひいては人類が解放されるためには、暴力による階級闘争が必要不可欠であるとマルクスが考えていたことは分析視角において示した。

上の引用部分を見てみると、シェリーが提唱する労働者解放の手段がマルクスのそれとは如何にかけ離れているかがわかる。シェリーは本作品において、徹底的な暴力の否定を訴えている。この非暴力の姿勢は、シェリーのフランス革命に対する評価に起因している。

Wherever has violence succeeded? The French Revolution, although undertaken with the best intentions, ended ill for the people ; because violence was employed, the cause which they vindicated was that of truth, but they gave it the appearance of a lie, by using methods which will suit the purposes of liars as well as their own.[23]

いったいいつ、暴力が成功を収めた試しがあったでしょうか。フランス革命は、最高の意図を持って行われたにもかかわらず、人々にとっては悪しき結果に終わりました。なぜなら、暴力が用いられたためです。人々が提唱した大義は真実でしたが、彼らは自らの方法だけでなく、嘘つきにふさわしい手段をも用いたために、偽りの結果をもたらしてしまったのです。[24]

シェリーはフランス革命を、市民を解放するという目的は評価しながらも、暴力的な革命であったと評価 している。[25] このフランス革命に対する否定的な評価は、シェリーの後の作品群にも、また次章以降取り上げる諸作品にも繰り返し反映され登場する。

さらに、シェリーの労働者解放の手段を考える上で以下の部分は重要である。

But I do not consider that they will or can immediately happen ; their arrival will be gradual, and it all depends upon yourselves how soon or how late these great changes will happen.[26]

しかし私はそれ［改革、引用者］が今すぐには実現されるとも、実現可能であるとも思いません。改革の実現は漸次的であり、いつ実現するかはこのような大いなる変化［人々の自己変革、引用者］をあなた方がどれだけ早くまたは遅くに成し遂げるかにかかっているのです。

すなわち、シェリーは労働者解放を、非暴力と道徳的・知的啓蒙を通じて漸次的に行われるべきものだと考えていたのだ。シェリーにとって労働者の解放とは、「革命」ではない「改革」であったといえる。

以上により、シェリーのマルクス主義との類似点・相違点が見えてきた。それらは以下の通りである。

まず、類似点は労働者に対する搾取の構造への鋭い告発である。労働者を解放することによって、貧富の差がないインターナショナルな人類の解放が達成されることを提唱した点で、シェリーはマルクスを先取りしていたということができる。

一方で、相違点は労働者解放後の展望と解放の手段である。シェリーはマルクス主義的な物質的・経済的な視点にとどまらず、ゴドウィニズムに強い影響を受けた理性・道徳の向上を提唱した。また、シェリーは徹底的な非暴力を通じた改革推進者であった。どれほど崇高な理念であっても暴力という間違った手段をとることを決して容認しないこの主張は、暴力的・革命的なマルクス主義とは決して相容れない。それ故に、このシェリーの非暴力主義はマルクス主義との比較の上では強烈な独自性を放っているといえるだろう。

シェリー的な労働者解放に関するこれらの指向性は、以降の諸作品にも基本的に受け継がれていくことになる。

(九州大学法学部卒：　もとじま　のぶや)

注

1. Edward Aveling and Eleanor Marx Aveling, *Shelley's Socialism*, Two lectures (London: private circulation, 1888; rept. London: Journeyman Press, 1979). Timothy Morton, ed.よりの再引用（pp.7-8）。
2. 同じくシェリーの最初期の代表作で、シェリーの社会主義的解釈において頻繁に分析対象となる詩作品として『クイーン・マブ』*Queen Mab*(1813)がある。この作品においては資本主義とそれに結託した政治権力に対する痛烈な批判ととれる描写があり、19 世紀イギリスの社会主義シンパのバイブル的作品として水面下で支持を集めた。今回この作品ではなく『アイルランド人民に告ぐ』*An Address to the Irish People* を中心に取り上げるのは、詩作品であるが故にメタフォリックで多様な解釈の可能性を有する『クイーン・マブ』に比べて、『アイルランド人民に告ぐ』は散文の政治パンフレットという形式上、マルクス主義的な社会批判の作品であるという解釈に疑問を差し挟む余地が少ないように思われるからである。
3. カール・マルクス、長谷部文雄訳『賃銀・価格および利潤』（岩波書店、1935 年）、84 頁。
4. 同掲書、82〜4 頁。
5. フリードリヒ・エンゲルス、大内兵衛訳『空想より科学へ―社会主義の発展』（岩波書店、1946 年）、85 頁。
6. 同掲書、84〜85 頁。
7. 社会主義にも流派が様々あり、労働者解放という共通の目的がありながらもそこに至るための手段は様々であった。例えば、革命的・暴力的なマルクス主義とは対象的に、ドイツ社会民主党やロシア・メンシェヴィキは議会主義的・漸次的な社会主義実現を志向した。
8. カール・マルクス、長谷部文雄訳『賃労働と資本』（岩波書店、1935 年）、38 頁。
9. シェリーは本作品をもってアイルランドの労働者たちを啓蒙するだけにとどまらず、自費で毛布や食料を配るなどもしていた。
10. Shelley, *The Complete Works*, pp.235-6.
11. パーシー・ビッシュ・シェリー、阿部美春・上野和廣・浦壁寿子・杉野徹・宮北恵子訳「アイルランド人民に告ぐ」（『飛び立つ鷲　シェリー初期散文集』南雲堂、1994）、63 頁によるが、訳出するにあたり一部修正。
12. このような、労働者に対する啓蒙のためのわかりやすい記述・説明という特徴は、マルクスの『賃労働と資本』や『賃銀・価格および利潤』などの入門作品にも通じる要素と言えるかもしれない。
13. Shelley, *The Complete Works,* V, pp.237-8.
14. 『飛び立つ鷲』66 頁によるが、訳出するにあたり一部修正。
15. *The Complete Works,* V, pp.233-4.
16. 『飛び立つ鷲』9~60 頁によるが、訳出するにあたり一部修正。
17. *The Complete Works*, V, p.235.
18. 『飛び立つ鷲』62 頁によるが、訳出するにあたり一部修正。
19. ウィリアム・ゴドウィン (1756~1836) はイギリスの政治哲学者。アナキズムの初期の提唱者であり、政府の撤廃と富の平等な分配を説いたことで知られる。ゴドウィンの著作である *Enquiry concerning Political Justice, and its Influence on General Virtue and Happiness* (1793)、いわゆる『政治的正義』はシェリーを始めとしたイギリス・ロマン主義の詩人たちにも多大な影響を与えた。また余談ではあるが、シェリーはゴドウィンの娘であるメアリー・ゴドウィン(1797~1851)と結婚したため、ゴドウィンはシェリーの義父にあたる。
20. 坂口周作『シェリーの世界―詩と「改革」のレトリック―』（金星堂、1986 年）、22 頁。
21. *The Complete Works*,V, p.234.
22. 『飛び立つ鷲』61 頁によるが、訳出するにあたり一部修正。
23. *The Complete Works*, V, pp.225-6.
24. 『飛び立つ鷲』45 頁によるが、訳出するにあたり一部修正。
25. このフランス革命に対するシェリーの評価は、『鎖を解かれたプロメテウス』*Prometheus Unbound* (1820)においてより強調して描写される。
26. *The Complete Works*, V, p.233.

参考文献

Shelley, Percy Bysshe. *The Complete Works of Percy Bysshe Sheeley* 10 vols. Gordian Press, 1965.

-----. *The Complete Poems of Percy Bysshe Shelley*. Random House, 1994.

-----. *Shelley's Poetry and Prose.* Edited by Donald H. Reiman and Neil Fraistat. W. W. Norton Company, 2002.

Morton, Timothy, ed. *The Cambridge Companion to Shelley.* Cambridge University Press, 2006.
Foot, Paul. *Red Shelley.* Sidgwick & Jackson, 1981.

パーシー・ビッシュ・シェリー、石川重俊訳『鎖を解かれたプロメテウス』（岩波書店、1957 年）。
パーシー・ビッシュ・シェリー、阿部美春・上野和廣・浦壁寿子・杉野徹・宮北恵子訳「アイルランド人民に告ぐ」（『飛び立つ鷲　シェリー初期散文集』南雲堂、1994 年）。
パーシー・ビッシュ・シェリー、原田博訳『プロミーシュース解放　およびその他の詩集　附「改革への哲学的見解」』（音羽書房鶴見書店、2017 年）。
坂口周作『シェリーの世界—詩と「改革」のレトリック—』（金星堂、1986 年）。
カール・マルクス、長谷部文雄訳『賃銀・価格および利潤』（岩波書店、1935 年）。
カール・マルクス、長谷部文雄訳『賃労働と資本』（岩波書店、1935 年）。
フリードリヒ・エンゲルス、大内兵衛訳『空想より科学へ—社会主義の発展』（岩波書店、1946 年）。
水田洋『マルクス主義入門』（社会思想社、1971 年）。

(編集者注：　本稿は、卒業論文として 2018 年 3 月九州大学法学部に提出された論文からの抜粋です。)

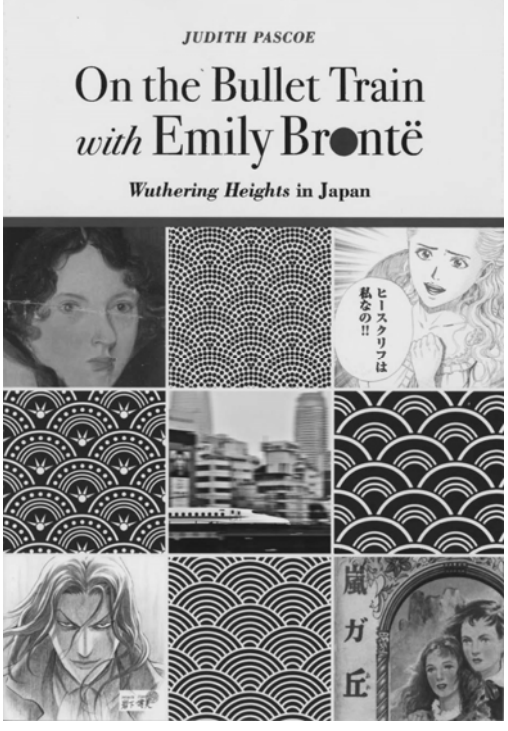
Review

On the Bullet Train with Emily Brontë:

Wuthering Heights *in Japan*

by Judith Pascoe

University of Michigan Press, 2017. 176 pp.



Hiroshi Takubo　田久保　浩

ミシガン大出版より新刊書プロモーション用のカードが送られてきた。本のジャケットを色刷りのカードに印刷したものである。宛名面には、日本語の定規を使って書いたような手書きの漢字で私の宛名と住所が書いてある。日本語を習ったことのある出版社のスタッフが手で書いたのか。手書きの文字で親しみを覚えたが、アメリカ・キーツ-シェリー協会の名簿のデータだとしたら漢字の住所宛名までわからないはずだし、不思議である。とにかく『エミリー・ブロンテと新幹線に乗って』というタイトルは面白い。著者、ジュディス・パスコ—については、彼女の *Romantic Theatricality: Gender, Poetry, and Spectatorship* (Cornell UP, 1997）の中の一章 “Women Poets and Della Cruscanism” は、イギリス・ロマン派詩の重要な背景として十八世紀末の女性詩人たちのはたした重要性を指摘する研究として重要なもので

ある。パスコーはまた、*Mary Robinson: Selected Poems* (Broadview Literary Texts, 2000) というメアリー・ロビンソンの選集の編集者でもある。早速、この本を取り寄せ、手に取ってみた。2018 年は『フランケンシュタイン』の出版 200 周年であると同時に、エミリー・ブロンテの生誕 200 年にもあたる。ロマン派研究者による日本でのエミリー・ブロンテ受容に関する比較文化的研究について、この欄で紹介することも場違いではないであろう。

パスコーはフルブライト研究員として 2009 年に来日する。それに先立つ 1 年前より日本語学習を始める。日本での研究のテーマとして日本における『嵐が丘』受容という問題に取り組む。著者はこれまでこの作品にしっかり取り組む機会がなかったという思いを持っていて、日本での研究の機会にその小説のどこが日本人の心をとらえるのかという問題を課題にして取り組むことを思い立ったということのようである。

パスコーは最初に日本でので『嵐が丘』の翻訳史をひもとく。最初の翻訳者は、東大でエドマンド・ブランデンの教えを受けた大和資雄だが、同じく共にエドマンド・ブランデンの講義をうけた阿部知二は、ブランデンが『リア王』、『モビー・ディック』、『嵐が丘』が英語文学の三大重要作品であると述べたことを記録しており、その影響もあってか後に彼自身の訳を出す(岩波文庫) 。これらの訳を含め、最近の鴻巣友季子訳 (2003) や田村妙子『絵と原文で楽しむ嵐が丘』（イラスト・市原順子、2010）など、パスコーは１９の日本語訳を数えている。

『嵐が丘』という小説の認知を日本に広めるうえでは、戦後公開されたウィリアム・ワイラー監督、ローレンス・オリヴィエ主演による映画の影響に注目する。弘兼憲史監修による漫画シリーズ、『漫画・世界名作ムービー「嵐が丘」』にも取り上げられているし、宝塚における二作の『嵐が丘』上演にもその影響が大きいとしている。宝塚での最初が主演古城都、脚本・演出・内海重典による大劇場公演（1969）、二作目は、和央ようか主演、太田哲則演出による宝塚バウホール公演 (1997)。パスコーは、これらの二作でヒースクリフ役を務めた元宝塚女優古城都と和央ようかにインタビューをおこない、宝塚の男役の女性俳優により『嵐が丘』がファンタスティックに演出されるところに目を見張る。パスコーは、『嵐が丘』の日本語での受容について「わたしはヒースクリフ」というキャサリンの言葉に焦点をあてるが、宝塚脚本家太田哲則氏とも対談し、近松門左衛門の心中もので日本人には社会から疎外された中で恋人同士が、同時に死を選ぶ中で相互を一体とものとみなす考え方が受け入れやすいという太田氏の説を紹介している。

「わたしはヒースクリフ」という言葉の日本文化への浸透を探る中で、吉田重喜監督による舞台を日本の中世に設定した映画（出演：田中裕子、松田優作、1988）の独自の世界にも注目する。「わたしはヒースクリフ」と話すキャサリン役に鏡を持たせ、ヒースクリフ役の「鬼丸」を鏡に置き換えている。その鏡はキャサリンの死後、棺に入れられ、鬼丸はこれを後に棺から取り出して胸に抱くという演出に原作についての深い解釈を見る。

『嵐が丘』の日本文化への浸透を見るうえで漫画作品には特別の注意を払っている。美内すずえによる有名な『ガラスの仮面』において、『嵐が丘』が劇中劇として取り上げられる中でヒロインがキャサリンという役と格闘するエピソードについて考察する。さらに『嵐が丘』が多くの漫画作家たちの想像力を刺激し、多くの作品を生んでいることを指摘する。岩下博美『マンガで読む名作「嵐が丘」』、英洋子『まんがグリム童話 (嵐が丘)』、桜井美音子『まんがグリム童話 嵐が丘―狂気の愛』、鈴賀れに『嵐が丘』、森園みるく『嵐が丘-ここは二人の愛の国』(ジュールコミックス)などである。さらに扇ゆずはによる、いわゆる「ボーイズラブ」のジャンルの漫画『嵐が丘』や美内すずえと同じく演劇に取り組む少女をヒロインとした「百合」と呼ばれるジャンル（レスビアンもの）の作品である志村貴子作『青い花』といった一連の漫画作品について紹介するなかで、「マンガは、しばしば筋から外れたり、細かい箇所に執着したりする中で、ヒースクリフの悪意、キャサリンのあこがれ、ブロンテのひねったメロドラマの世界を伝えている」(53) と、その表現性の豊かさを指摘する。

パスコーの著書は『嵐が丘』という作品の日本での受容を探る中で、彼女自身が日本語と日本文化理解に取り組むプロセスが並行して語られる点がその魅力である。彼女がある時、丸井デパート内のカフェで友人と待ち合わせた際、「O1O1」というロゴをデパート名と誤解し「オーイ、オーイ」と呼んでいたところ、日本人の友人に、これは、視覚的な洒落

で、「マル」と「イチ」そして、電話番号をかけたものだと教えられる。ここで、たとえ 99.95%の日本文学と文化を引っ張り出したとしても、まだ 0.05%が残っているのだ。『嵐が丘』が日本人の読者に届く道筋の微妙な理解は、自分には到達できないのではないかと思うべきところで、「そうしたときに助けてくれる友人がいることをむしろ幸運と思う」と思い直す。2008 年以来、ずっと日本語を学び続け、『嵐が丘』の日本での受容という課題に取り組む中で、異文化の世界を探ることの困難さとともに、その中で味わう喜びや楽しみが伝わってくるところは、われわれ日本人研究者がイギリスの文化を学ぶ上での苦労と重なり、特に興味深いところである。特に、宝塚上演や、漫画といったポピュラー文化に注目している点は評価できる。日本でのテレビ連続ドラマ『愛の嵐』（田中美佐子主演、1986）、『新・愛の嵐』（出演、藤谷美紀、要潤、 2002）などという作品についても触れられている。ポピュラー文化の面においては、例えば音楽において、イギリス人歌手のケイト・ブッシュによる「嵐が丘」という曲が日本でも人気があることなどは彼女は知っていただろうか。こうした方面でさらに探る余地があるであろう。

一方で、イギリス文学研究としての成果については、パスコーが、日本における『嵐が丘』受容、特に「わたしはヒースクリフ」という一文が日本人にどう解釈されたかということを切り口に、この作品の理解と日本文化の特質に迫ろうという目的が達成されたかということに関して物足りない印象も受ける。パスコーがロマン派文学研究者ということを考えると、ブロンテの作品の理解の深まりという面では課題が残る。

たとえば、「わたしはヒースクリフ」という問題のフレーズであるが、これはリントンと結婚することでヒースクリフを捨ててしまってよいのかというネリーの問いに対するキャサリンの答えの中に出てくる言葉である。キャサリンは「ヒースクリフを捨てるくらいなら、この世のリントンがすべて溶けてなくなってもいい」と言い、ヒースクリフこそが自分をすべて包み込む存在であると言っている。つまり「わたしはヒースクリフ」という言葉のなかには、自分とヒースクリフはすでに一心同体なのだから自分が他の男と結婚しても、ヒースクリフとの関係は損なわれないという主張がある。ネリーはこれを、リントンやヒースクリフの感情を無視した身勝手な考えと突き放す。パスコー自身も対談をしている水村美苗は、『嵐が丘』を現代日本文学として取り込んだ『本格小説』において、キャサリンを日本人に移植するにあたっては、このヒロインをやはりネリーの解釈と同じく身勝手な女にせざるを得なかった。しかしブロンテのキャサリンは身勝手さを含みながらも、もっと突拍子もない壮大な考え方を持っている。そこにはロマン派につながるビジョンがある。ワーズワースは、子どものころの思い出に想像力を投影することで「ルーシー」や「デンマーク人の子」らの理想的ビジョンを生み出し、現実世界との矛盾を示した。シェリーはその理想を実践しようとする。メアリーとのヨーロッパ旅行から帰った後、妻のハリエットに、メアリーこそが自分の愛する相手だと明言しながらも、彼女にメアリーらと一緒に暮らそうという提案をする。これはキャサリンが、リントンやヒースクリフと一緒に仲良く暮らそうと、もし互いの理解があるのならばそれは可能だと主張するのと全く同じである。そうした奔放な発想が、ボーイズラブや百合漫画のアーティストたちの想像力を刺激する要因ではないのか。そこに踏み込むことで、ロマン派の思想と同時に日本文化のはらむ裏と表、建前と本音の関係の問題、つまり、ホモセクシャリティーが、「やおい」や「百合」といったサブカルチャーの形で周辺化されるという文化現象の意味が見えてくる可能性があるのではないか。

パスコーは、この本の主題を探る中で、『嵐が丘』の翻訳書が１９もある日本と比較して、自分の読みたい日本の小説の英訳がまったくないことの多い英語圏の出版文化との差を痛感し、これを文化的な貧困と嘆く。一方、日本語検定 3 級を目指して何年も勉強しながら、成果の上がらないように見える自分の取り組みの中からも、自分にとっての収穫の手ごたえを感じる所がある。この本を読んでいて読者がうれしく感じる所である。「キャサリンが〈私はヒースクリフ〉と言うように、わたしも日本語を翻訳しようとする中で自分を別の人間に翻訳しようとしていたのだ。これまで日本語の『嵐が丘』を理解しようと費やしてきた時間は、日常の自分と別人になるためのものだったのだ」(118)。パスコーがそう思った瞬間、これまで外国語を覚えようとしてきたことが自分の人生を豊かにしてきたことに気がつくのである。

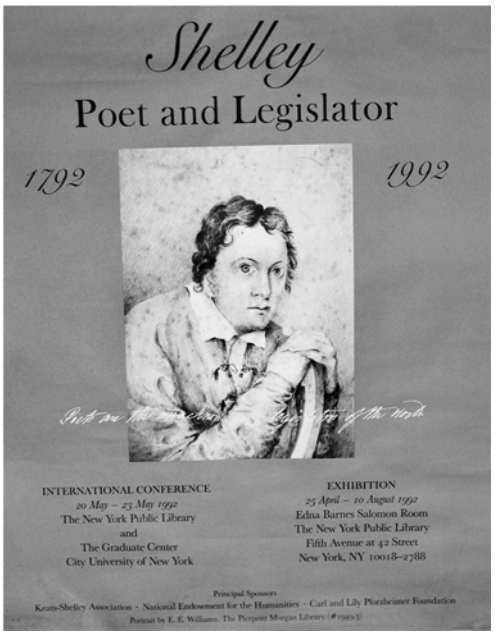
（たくぼ　ひろし：　徳島大学)

日本シェリー研究センター　アーカイブ II

日本シェリー研究センター設立の契機

シェリーをめぐる初の国際会議
「シェリー ― 詩人と世界の立法者」

1992 年 5 月 20 日～23 日
　ニューヨーク・パブリック・ライブラリー



阿部　美春

前号でお知らせしたように、石川重俊先生から寄託されました、センター創成期の資料を、アーカイブとして、著作権者からの許諾のもと、順次公開しております。今回は、センター設立の契機となった、国際会議「シェリー　詩人–世界の立法者」(Shelley: Poet and Legislator of the World)（1992 年 5 月 20 日から 23 日まで、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーで開催）関連の資料を掲載いたします。一部を本号に、（許諾を得た）全文をホーム・ページ[http://prometheus-shelleys.org/]に掲載しております。

センターの設立は、シェリーをめぐる初の国際会議へ参加した研究者と愛好家の呼びかけから始まりました。現会員では、本田和也氏、田久保浩氏、宮北恵子氏が参加されました。

そもそもの出発点は、床尾辰男氏から石川重俊氏への書簡でした。当時、ボドレアン図書館のシェリー手稿編集に携わるなど国際的に活躍されていた床尾氏を通じて、ステュアート・カラン(Stuart Curran)氏とベティ・ベネット(Betty T. Bennett)氏連名の、シェリー生誕二百周年を記念する国際会議への招請状が、石川重俊氏に届けられました。簡にして要を得た床尾氏の手紙は、「日本におけるシェリー研究の最長老」石川氏への敬意をこめて、「明治から今日に至るまでの日本のシェリー研究の歴史を振り返っていただけたら」と、国際会議での講演を請うものです。

一方主催者カラン氏とベネット氏連名の招請状は、A4 版用紙六枚におよび、初の国際会議に向けた意気込みのほどを伝えています。会議の目的は、七カ国語に通じ、世界市民を任じたシェリーにふさわしく、アメリカ、西欧にとどまらず中東欧、ソ連（当時）、中東、オセアニア、アジアから参加者を得、詩人が多様な文化と社会に及ぼしてきた影響と意味を、今日の多角的な視点から議論するところにある、と。

さらに国際的議論が可能になった背景として、当時まだ進行中であった東欧革命が新たな国際交流の可能性を開いたこと、ノートブックと手稿のファクシミリ出版などテキスト研究の土台が整備されつつあること、自由と人権を擁護する「世界の非公認の立法者」という詩人像が健在であると同時に、詩人の懐疑主義的側面が、ポスト構造主義とディコンストラクションの先駆けという新たな詩人像を生み出していることが揚げられています。シェリー研究を、著しい変容を遂げる時代の中に鳥瞰し、国境を超えた議論を呼びかける招請状、ぜひ全文をご覧くださ

い。

今回の資料を掲載するにあたり、Keats-Shelley Association of America (KSAA)から快諾をいただきました。現会長ニール・フレイスタット(Neil Fraistat) 氏に、1992 年の国際会議がセンター設立の契機であることを伝えた際、アーカイブ掲載の承諾と同時に、当センターのホームページで閲覧できることを、KSAA ホームページで取り上げようとの申し出をいただきました。さらにその後、当センターのことをツイートしました、とメールをいただき、人文学のデジタル・アーカイブ化のパイオニアらしい素早い対応に感心いたしました。

以下の資料をホームページに掲載しております。

(1) 床尾辰男氏から石川重俊氏に宛てた書簡の封筒。(1991 年 1 月 24 日付、(京都市) 左京の消印)

(2) ステュアート・カラン氏とベティ・ベネット氏連名による、シェリー生誕二百周年を記念する国際会議への招請状。

(3) ステュアート・カラン氏とベティ・ベネット氏連名、石川重俊氏宛書簡。(1991 年 9 月 12 日付)

(4) 石川重俊氏からステュアート・カラン氏とベティ・ベネット氏宛書簡。(1991 年 9 月 27 日付)

(5) 石川重俊氏からステュアート・カラン氏とベティ・ベネット氏宛書簡。(1992 年 2 月 10 日付)

(6) ステュアート・カラン氏から石川重俊氏宛書簡。(1992 年 3 月 3 日付)

(7) 石川重俊氏からステュアート・カラン氏とベティ・ベネット氏宛書簡。(1992 年 4 月 3 日付)

(8) 石川重俊氏からステュアート・カラン氏宛書簡。(1992 年 7 月 15 日付)

(9) 石川重俊氏からドナルド・ライマン氏宛書簡。(1992 年 8 月 17 日付)

(10) 国際会議 “Shelley, Poet and Legislator, 1792-1992” のポスターと案内のコピー。

SHELLEY: POET AND LEGISLATOR OF THE WORLD
20-23 MAY, 1992

The Keats-Shelley Association of America announces a four-day international conference to celebrate the bicentenary of Percy Bysshe Shelley (1792-1822): poet, philosopher, political visionary, and citizen of the world. To set Shelley on a world stage speakers representing a wide variety of critical and scholarly interests and backgrounds have been invited not only from the U.S., Canada, and the United Kingdom, but also from the breadth of Europe--France, Germany, Hungary, Italy, Poland, Rumania, and Russia--and from South Africa, Syria, and Japan. Meeting at the City University of New York Graduate Center and New York Public Library, through lectures, panels, and general discussion participants will explore the impact of Shelley's art and thought over two centuries, their significance for the contemporary world and ramifications for the future. Topics will range from specific nuances opened up by new textual research, to Shelley's conception of the poet's role and his own place in nineteenth-century social thought, to his centrality in current postmodern critical debates. Along with the conference, the New York Public Library will mount a major exhibition of manuscripts and personal artifacts from the Carl H. Pforzheimer Shelley and His Circle Collection, the major archive on the poet outside England.

Although authors of major work on Shelley in America and abroad have been invited, the coordinators encourage others to propose topics of relevance to the conference and/or to send in one-page abstracts of potential contributions: **deadline 14 February 1992.** In addition, five stipends of $200 have been set aside to assist graduate students with a scholarly interest in Shelley's writings. Applicants should send either coordinator a statement relating their scholarly concerns to the goals of the conference and indicating what they would hope to derive from participation. The application should be supported independently by a written recommendation from a faculty supervisor: **deadline 14 February 1992; notification 21 February 1992.**

TRAVEL AND HOUSING: American Airlines will provide reduced fares (40% off regular fare, 5% below lowest apex fare, plus waiver of requirements). Two hotels are designated for conference housing:

The Grand Hyatt (first class, c. $160 a night) at 42nd and Park.
The Lexington (economy, c. $90 a night) at Lexington and 47th.

ALL ARRANGEMENTS SHOULD BE MADE THROUGH JOYCE STOGO OF ZENITH TRAVEL (16 EAST 34TH ST., NEW YORK, NY 10016): tel 212/889-6969; toll free 800/221-2786; telex 236244 ZENTUR; fax 212/594-4754. Although there is no conference fee, for planning and space considerations we ask prospective attendees to **return the enclosed card by 10 April 1992.**

COORDINATORS:

Dr. Betty T Bennett, Dean	Professor Stuart Curran
College of Arts & Sciences	Department of English
The American University	Bennett Hall
4400 Massachusetts Avenue, N.W.	University of Pennsylvania
Washington, D.C. 20016	Philadelphia, PA 19104-6273
202/885-2446; Fax 202/885-2429	215/898-7355; Fax 215/573-2063

Shelley: Poet and Legislator of the World is supported by a major grant from the National Endowment for the Humanities, and by the Keats-Shelley Association of America, the New York Public Library, the Carl and Lily Pforzheimer Foundation, the City University of New York, the American University, and University of Pennsylvania.

資料 (10) 国際学会の開催案内。

アーカイブ資料
(2) ステュアート・カラン氏とベティ・ベネット氏連名による、シェリー生誕二百周年を記念する国際会議への招請状。6 ページ中、pp. 1-4.

SHELLEY: POET AND LEGISLATOR OF THE WORLD

MAY 20-23, 1992, NEW YORK PUBLIC LIBRARY

Betty T. Bennett
Dean of Arts and Sciences
The American University
Washington, D.C. 20016

Stuart Curran
Department of English
University of Pennsylvania
Philadelphia, PA 19104-6273

Purpose.

1992 marks the 200th anniversary of the birth of Percy Bysshe Shelley (1792-1822): poet, philosopher, political visionary, and cultural reformer. We propose an international conference to consider these varied aspects of his art and thought within an integrated framework. Among the specific concerns the conference will address are the sources of Shelley's internationalism, his conception of the poet as legislator of the world, his actual legacy within the nationalist reform struggles of the nineteenth century and in passive resistance movements in the twentieth century, his recent emergence as a forerunner of poststructuralist philosophy and linguistics, the effect of the new textual scholarship (e.g. publication of the notebooks and manuscripts in facsimile), the diversity of his impact on various cultures (American, British, European, Asian), and the enduring importance of his poetry on a world scale. Such a conference is particularly appropriate for a writer fluent in seven languages (who translated from six) and who, after the Enlightenment model, conceived of himself as a citizen of the world. It is also timely, since the liberalization of eastern Europe, according to a script Shelley himself might have written, offers the first opportunity in the memory of almost all Shelley students for a free exchange of American and western European scholars with

their counterparts in the east, many of whom have labored in isolation for years; and it should likewise open a doorway to the newer scholarship now being seen in Asia. The conference will draw participants from every part of the United States, from Canada, Britain, and Australia, and from Italy, the united Germany, France, Greece, Czechoslovakia, Hungary, Romania, the Soviet Union, Syria, India, and Japan.

This will be the first time ever that such an international conference on Shelley has been assembled. Its purpose will be not to homogenize such diverse cultural perspectives and traditions, but rather to foster a spirited exchange among them. We will want, on the one hand, to examine the ways in which Shelley's legacy has altered in time or has been reinvested. On the other hand, as useful as is such a consolidation of the past, it is equally important, as the almost explosive vitality of current publication on Shelley indicates, to nourish the breadth of new perspectives that will carry Shelley's influence into a third century. Although a bicentenary event by its nature partakes of celebration, in the spirit of skepticism that was Shelley's hallmark, we will want fairly to consider the possible limitations as well as the values inherent within his vision.

In particular, this conference will want to focus on how much in recent years the motive force driving Shelley scholarship has been coming from different, virtually opposite, conceptions of his writings and thought. On the one hand there is the libertarian Shelley who celebrates the progress of liberty as a human birthright and discerns the psychological and social

responsibilities involved in ensuring its continuance. This is unquestionably the poet in a still potent role as "unacknowledged legislator of the world." On the other hand, there is Shelley the confirmed skeptic who sees all words as metaphors, all systems as fictions, all truths as relative because ultimately unknowable. This deregulative thinker has been rediscovered as a precursor of modern poststructuralist/deconstructive linguistics and philosophy and of the indeterminacy of modern physics. One can begin to discern an attempt to relate these two distinct conceptions in the writings of younger deconstructive critics like Jerrold Hogle (Shelley's Process, 1988) and Tilottama Rajan (The Supplement of Reading, 1990), but one can still ask if their conception of philosophical anarchism is compatible with the political anarchism emphasized by Michael Scrivener (Radical Shelley, 1982), and whether the term itself would be acceptable to those scholars (P.M.S. Dawson, The Unacknowledged Legislator, 1980; Donald Reiman, Romantic Texts and Contexts, 1987) who insist strictly on a grounding in the actual history of the age. There are likewise other alternative conceptions that need exploration: between the British and American Shelley, or between the Shelley of the English-speaking world and the figure translated into so many diverse cultures and contexts. This conference will be the first ever to be planned on such a scale that such questions can be fruitfully asked. _

Sponsor.

The conference is being planned by the Keats-Shelley Association of America, Inc., which is the principal organization

in the United States devoted to research on the Younger Romantics of England, including Shelley. The Association boasts over 300 individual members, and its journal, the Keats-Shelley Journal, which publishes documentary notes, critical and scholarly articles, and an exhaustive annual bibliography, is the international journal of record for scholarship on these figures. Its editors, Betty Bennett and Stuart Curran who are the major coordinators of the conference, have already solicited the approval of the KSA to publish its proceedings in a specially enlarged issue and increased edition of the Keats-Shelley Journal in 1993. The New York Public Library will furnish the major institutional site for the conference because its collection on "Shelley and His Circle" (the former Carl Pforzheimer Library) is the major American archive on Shelley, sharing with the Bodleian Library, Oxford, the preponderance of the poet's papers. The dates of the conference are planned to coincide with the opening of a major exhibition from this collection at the Library and with the 1992 annual meeting of the Keats-Shelley Association, allowing us to draw directly on a large public interest in the Shelley bicentenary.

For the full text, see Japan Shelley Studies Center Web site:
http://prometheus-shelleys.org/

シェリー読書会の思い出

古川恵美

今から約 10 年前のことになりますが、2008 年 3 月に中村健二先生主催のシェリー読書会の世話役を拝命いたしました。会は 2011 年 6 月の第 18 回まで行われ、場所は笠原順路先生のご厚意で明星大学にて、途中からは田中みんね先生のご助力で立教大学の教室をお借りしての活動となりました。扱った作品は Percy Bysshe Shelley の "The Sensitive-Plant," "Julian and Maddalo," "Lines written among the Euganean Hills," *Epipsychidion* で、参加者がそれぞれの分担箇所を訳し、中村先生がコメントをくださるという方法で 1 つずつの作品を読み進めていきました。個別の訳に加えて中村先生がご用意くださった翻訳と注釈のハンドアウトをもとに、参加された熱心な先生方の間で発展的な議論が行われました。毎回充実した会となっていたことは世話役としても参加者としても嬉しく、大変貴重な勉強の機会だったと記憶しております。第 18 回の会の後にお休みをはさんで再開を目指しておりましたが、中村先生のお仕事のご都合と世話役の私自身の事情により 2014 年 6 月に残念ながら会を解散することが決まりました。

その後、私はドイツで数年間暮らしましたが、この読書会に関わってくださった素晴らしい先生方のことや、詩の美しさや力強さを共有した豊かな時間のことを折に触れて懐かしく思い出しておりました。特に、日常生活においては英語やドイツ語を使う毎日で、必ずしも一語一句に細心の注意を払ってコミュニケーションできる場面ばかりではありませんでしたので、そういった時には一つ一つの言葉の意味や音を味わいながら進めていく詩の精読という繊細な作業の魅力を改めて思い出して本棚から詩集を取り出すことも幾度となくありました。読むたびに新しい発見があり、自分自身がおかれている環境の変化によっても読み方が変わっていく面白さにも気づかされました。また、在独中には縁あって各国大使館関係者の方々なども参加されている団体に所属して様々な活動に関わりました。その中の英語文学を扱うグループでいろいろな国の方々と文学作品について意見を交換したり共感したりできたことは、日本の大学やイギリスの大学院で培った経験だけでなくシェリー読書会で文学を通して多くの人と繋がる楽しみを知っていたからだと思います。ドイツで過ごした時間の中で、自己の内面と向き合うときにも、世界の人々と繋がるときにも、どちらにおいても文学は大きな役割を果たすことを改めて身をもって感じ、文学の可能性を学生の時分とはまた違った形で再認識しました。日本に帰国し、読書会とは異なる場にはなりますが、また新たな気持ちで詩と向き合いながら研究に取り組んでまいりたいと思っております。(ふるかわ　えみ)

NEW MEMBERS

元島信矢さん

元島信矢と申します。九州大学法学部出身で、法学部にはしばしばいる「法学嫌いの法学部生」でした(笑)。法学部生だったにもかかわらず、読む本はシェリー作品や SF 小説、サルトルやニーチェといった哲学、ボードリヤールなどの社会学という変わり者です。

政治史の熊野直樹教授のゼミに所属し、国家緊急権や独裁者に関する政治史について専攻しました。学びの中で政治的・社会的な関心が高まり、かねてからのシェリーへの関心と、新たに学んだ資本主義的な搾取・経済格差の問題が重なり合っていきました。そういう経緯で、卒業論文はパーシー・ビッシュ・シェリー作品のマルクス主義的解釈というテーマで執筆しました。

４月からは学生生活を終えて社会人です。福岡は天神の IT 企業に就職し、プログラマーになるために修行の日々が始まります。文系で全く畑違いの職場ではありますが、将来を見据えると IT 技術は必ず武器になることは確実なのでがんばって身に着けたいという志に燃えております。仕事を頑張って、稼いだお金をシェリー研究センターでのさらなる学びのための資金を捻出しようと思っております。

新米会員ですが、これからどうぞ末永くよろしくお願いいたします。（もとじま　のぶや）

会員業績調査（2017 年度）

池田 景子　IKEDA Keiko

1 “Erasmus Darwin’s Frequent Uses of the Term of Hieroglyphic in *The Temple of Nature*” Kyushu International University Association of Liberal Arts, ed. *Studies of Liberal Arts* 22.1 (2015), 79-95.

2 「『詩の弁護』における P.B.シェリーの鏡再考―動詞 reflect の意味を手掛かりに」九州国際大学教養学会編『教養研究』第 23 巻第 3 号（2017 年）pp.1-21.
“A Reconsideration of P. B. Shelley’s Mirror in *A Defence of Poetry*: With the Meaning of the Verb ‘Reflect’ as a Clue” Kyushu International University Association of Liberal Arts, ed., *Studies of Liberal Arts* 23.3 (2017), 1-21.

3 「P. B. シェリーの『詩の弁護』におけるヒエログリフの比喩―エラズマス・ダーウィンから引き継いだ伝統」イギリス・ロマン派学会編『イギリス・ロマン派研究』第 41 号（2017 年）pp.13-26.
“A Metaphor of Hieroglyphics in P. B. Shelley's *A Defence of Poetry*: A Literary Heritage from Erasmus Darwin” Japan Association of English Romanticism, ed., *Essays in English Romanticism* 41 (2017), 13-26.

4 「プリズムの多面鏡による光の乱反射－P.B.シェリーの『詩の弁護』を中心に」九州国際大学教養学会編『教養研究』第 24 巻第 2 号 (2017 年) pp.11-33.
"Diffuse Reflected Light Via a Prismatic and Many-Sided Mirror: In P. B. Shelley's *A Defence of Poetry*" Kyushu International University Association of Liberal Arts, ed., *Studies of Liberal Arts* 24.2 (2017), 11-33.

上野　和廣　UENO Kazuhiro

1 「シェリーの未完成の詩,"The Triumph of Life"の研究」神戸女子短期大学『論攷』61 巻(2016 年)．1－11 頁.
"A Study of Shelley's Unfinished Poem 'The Triumph of Life'" *The Ronko, Bulletin of Kobe Women's Junior College*, Vol. 62, pp.1-11.

田久保　浩　TAKUBO Hiroshi

1 「デラクルスカ派の詩における感受性のイデオロギーと十八世紀メディア」.『言語文化研究』 25 (2017): 1-22.
"The Ideology of Sensibility in Della Cruscan Poetry and the 18th Century Media." *Journal of Language and Literature* 25 (2017): 1-22.
徳島大学機関リポジトリ:
http://repo.lib.tokushima-u.ac.jp/ja/list/t-pubs/jll/25/--/item/110983

田中 千惠子　TANAKA Chieko

1 「迷宮のなかの光と闇−草間彌生の文学を読む」『ユリイカ―詩と批評』第 49 巻第 5 号（東京：青土社、2017 年、) pp. 143-52.　ISBN: 978-4-7917-0325-8
"Yayoi Kusama's Poetry and Fiction." *Eureka: Poetry and Criticism*. Vol. 49-5 (Tokyo: Seido-sha、2017), 143-52.

事務局便り

＜2016 年度分会計報告＞

小柳康子、佐々木眞理両氏の会計監査を受け、平成 29（2017）年 12 月 2 日に行われた大会総会で承認されました。

＜会員異動＞

退会　石幡直樹氏。これまでのご厚誼を感謝いたします。
入会　元島信矢氏。加藤芳子氏（再入会)。どうぞよろしくお願い申し上げます。

＜幹事異動＞

平成 30 年 4 月 1 日着任　岡隼人氏。今後のご活躍を期待しております。

＜第 27 回大会＞

NEWS のページでもお知らせしましたように、次回第 27 回大会は、平成 30（2018）年 12 月 1 日（土）立命館大学衣笠キャンパスにて、クリストフ・ボード教授による特別講演、次いで「プロメテウス・カルトと『フランケンシュタイン』」をテーマとして、司会をアルヴィ宮本なほ子氏、パネリストを廣野由美子氏、阿部美春会長が務めるシンポージアムが行われます。非会員の方も歓迎いたしますので、是非皆さん、お誘い合わせの上奮ってご参加ください。

＜大会に向けた勉強会のご案内＞

2018 年大会に向けて、テーマについての理解を深めてより積極的に大会に参加できるよう準備するとともに、会員同士親交を深めることを目的とする勉強会を開催しますので、皆様の積極的なご参加を募集します。

日程： 2018 年 9 月 8 日（土）13：00～9 日（日）17：00 頃
場所： 明星大学（東京都日野市）
募集メンバー： 会員全員、およびその関係者
方法： テキスト精読、各自報告、および議論
① 1 日目午後、② 2 日目午前、③ 2 日目午後の、3 部会に区切り、部分参加も自由、途中参加・退室自由とする。
テキスト：*Frankenstein*（1818）、その他。
部会内容
① 序文(1818)、第一巻（Letter I ～ Chapter VII）
② 第二巻(Chapter I ～ Chapter IX)
③ 第三巻(Chapter I ～ Chapter VII, Letters)、序文(1831)

①②③とも、基本的に *Frankenstein* を参加者各々に分担をあらかじめ決めておいて、精読します。参加者による発表・報告、および議論を、その場の流れで進めて行きます。到達目標は定めません。時間にゆとりがあれば、今年の大会テーマである 「German Influences on *Frankenstein*」、「プロメテウス・カルト」について質疑、コメント等、議論をしていきます。

今回は、以下のテキストを使用します。

Frankenstein or The Modern Prometheus, The 1818 Text. Ed. Marilyn Butler. Oxford World Classics. （Amazon 等で、千円以内で入手できます）

応募方法： 事務局にお知らせください。
応募締切： テキスト分担割の都合上、7 月末に一度締め切りますが、基本的に自由参加なので、当日参加も可能です。

＜ホームページリニューアル＞

当センターのホームページがリニューアルしました。平原正氏と宇木権一氏に HP 管理を担当いただいています。ぜひ以下のアドレスにアクセスしてご覧ください。

http://prometheus-shelleys.org/

＜ご寄稿のお願い＞

対象となる年代について各分野の研究動向、新刊紹介、書評等を掲載しています。奮ってご寄稿ください。年報編集長の田久保浩氏宛、または事務局宛のいずれでも受け付けております。

日本シェリー研究センター規約

一条 本会の名称を「日本シェリー研究センター」とする。

二条 本センターは広く Percy Bysshe Shelley および Mary Shelley に係わる研究の普及・向上に貢献することを目的とする。

三条 本センターは前記の目的を遂行するため、次の活動を行う。

一 研究会・講演会・シンポージアム等の開催。

二 内外研究文献情報の収集・広報。

三 年報の発行。

四 その他必要と認められたもの。

四条 本センターは前記の趣旨に賛同する会員によって構成される。

五条 会員は三千円、学生会員は一千円を年会費として、当該会計年度(四月一日より翌年三月三十一日まで)内に納入することとする。会計は監査の承認を得て、毎年総会において報告される。

六条 本センターは議決機関として総会を設け、年一回開催することとする。

七条 本センターは上記の活動の執行のため次の役員を置く。

一 会長(一名)

二 幹事(若干名)

(一)役員は総会にて選出される。任期は二年とし再任を妨げない。

(二)会長は本センターを代表し統括する。

(三)幹事(会長を含む)は企画運営・会計・事務局などを分担し、活動の運営に責任を負う。

付則

・本センターの規約の変更は総会の承認を得ることとする。

・三条の細則は内規を持って別に定める。

平成 27 年 12 月 5 日改正

Shelley Studies: The Works & Epoch 1792-1851

Annual Bulletin of Japan Shelley Studies Center

Vol. 26 (July 2018)

日本シェリー研究センター年報第 26 号 (2018 年 7 月)

ISSN 1344-1957

発行者 日本シェリー研究センター

事務局 〒069-8501 北海道江別市文京台緑町 582 番地

酪農学園大学 白石治恵 気付

Tel & Fax: +81-(0)11-388-4877 E-mail: harues@rakuno.ac.jp